

**2019年度
大学院国際文化研究科
講義概要（シラバス）**



法政大学

科目一覧

最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

[X2001]	国際文化研究 A [廣松 勲、田島 樹里奈]	春学期授業/Spring	1
[X2002]	国際文化研究 B [大嶋 良明、田島 樹里奈]	秋学期授業/Fall	2
[X2003]	国際文化共同研究 A [佐々木 一恵、田島 樹里奈]	春学期授業/Spring	3
[X2004]	国際文化共同研究 B [曾 士才、市岡 卓]	秋学期授業/Fall	4
[X2005]	多言語相関論 I A [栗飯原 文子]	春学期授業/Spring	5
[X2006]	多言語相関論 I B [栗飯原 文子]	秋学期授業/Fall	6
[X2007]	多言語相関論 II A [リービ 英雄]	春学期授業/Spring	7
[X2008]	多言語相関論 II B [リービ 英雄]	秋学期授業/Fall	7
[X2009]	多言語相関論 III A [輿石 哲哉]	春学期授業/Spring	8
[X2010]	多言語相関論 III B [輿石 哲哉]	秋学期授業/Fall	9
[X2011]	多文化相関論 I A [岩川 ありさ]	春学期授業/Spring	10
[X2012]	多文化相関論 I B [岩川 ありさ]	秋学期授業/Fall	11
[X2014]	多文化芸術論 I [佐藤 千登勢]	春学期授業/Spring	12
[X2015]	多文化芸術論 II [廣松 勲]	秋学期授業/Fall	13
[X2016]	異文化社会論 II A [浅川 希洋志]	春学期授業/Spring	14
[X2017]	異文化社会論 II B [浅川 希洋志]	秋学期授業/Fall	15
[X2018]	ナショナリズム／エスニシティ論 A [中島 成久]	春学期授業/Spring	16
[X2019]	ナショナリズム／エスニシティ論 B [中島 成久]	秋学期授業/Fall	17
[X2020]	マイノリティ社会論 A [曾 士才]	春学期授業/Spring	18
[X2021]	マイノリティ社会論 B [曾 士才]	秋学期授業/Fall	19
[X2023]	多言語社会論 A [大中 一彌]	春学期授業/Spring	20
[X2024]	多言語社会論 B [大中 一彌]	秋学期授業/Fall	21
[X2025]	多民族共生論 I A [松本 悟]	春学期授業/Spring	22
[X2026]	多民族共生論 I B [松本 悟]	秋学期授業/Fall	23
[X2027]	多民族共生論 II A [高柳 俊男]	春学期授業/Spring	24
[X2028]	多民族共生論 II B [高柳 俊男]	秋学期授業/Fall	25
[X2029]	国際ジャーナリズム論 [神林 毅彦]	春学期授業/Spring	26
[X2030]	国際文化交流論 II A [木村 真]	秋学期授業/Fall	26
[X2031]	比較宗教文明論 [白杵 陽]	秋学期授業/Fall	27
[X2032]	多文化情報空間論 I A [森村 修]	春学期授業/Spring	28
[X2033]	多文化情報空間論 I B [森村 修]	秋学期授業/Fall	29
[X2034]	多文化情報メディア論 I A [大嶋 良明]	春学期授業/Spring	30
[X2035]	多文化情報メディア論 I B [大嶋 良明]	秋学期授業/Fall	31
[X2036]	多文化情報メディア論 II [重定 如彦]	秋学期授業/Fall	33
[X2037]	Thesis Writing A [ジェイソン・ポール・スミス]	春学期授業/Spring	34
[X2038]	Thesis Writing B [ジェイソン・ポール・スミス]	秋学期授業/Fall	35
[X2039]	Oral Presentation [マーク・フィールド]	秋学期授業/Fall	36
[X2040]	国際協力論 [松本 悟]	春学期授業/Spring	37
[X2041]	国際人権論 [藤岡 美恵子]	春学期授業/Spring	38
[X2042]	多文化情報ネットワーク論 B [和泉 順子]	秋学期授業/Fall	39
[X2043]	国際文化研究日本語論文演習 A [浅利 文子]	春学期授業/Spring	40
[X2044]	国際文化研究日本語論文演習 B [浅利 文子]	秋学期授業/Fall	41
[X2045]	国際文化研究日本語論文演習 C [浅利 文子]	春学期授業/Spring	42
[X2050]	修士論文演習 A [各専任指導教員]	春学期授業/Spring	43
[X2051]	修士論文演習 B [各専任指導教員]	秋学期授業/Fall	44
[X2052]	修士論文演習 A [佐々木 一恵]	春学期授業/Spring	45
[X2053]	修士論文演習 B [佐々木 一恵]	秋学期授業/Fall	46
[X2054]	修士論文演習 A [リービ 英雄]	春学期授業/Spring	47
[X2055]	修士論文演習 B [リービ 英雄]	秋学期授業/Fall	48
[X2056]	修士論文演習 A [曾 士才]	春学期授業/Spring	49
[X2057]	修士論文演習 B [曾 士才]	秋学期授業/Fall	50
[X2058]	修士論文演習 A [大嶋 良明]	春学期授業/Spring	51
[X2059]	修士論文演習 B [大嶋 良明]	秋学期授業/Fall	52

【X2060】	修士論文演習 A [中島 成久]	春学期授業/Spring	53
【X2061】	修士論文演習 B [中島 成久]	秋学期授業/Fall	54
【X2062】	修士論文演習 A [高柳 俊男]	春学期授業/Spring	55
【X2063】	修士論文演習 B [高柳 俊男]	秋学期授業/Fall	56
【X2100】	博士論文演習 I A [各専任指導教員]	春学期授業/Spring	57
【X2101】	博士論文演習 I B [各専任指導教員]	秋学期授業/Fall	57
【X2102】	博士論文演習 II A [各専任指導教員]	春学期授業/Spring	58
【X2103】	博士論文演習 II B [各専任指導教員]	秋学期授業/Fall	59
【X2104】	博士論文演習 III A [各専任指導教員]	春学期授業/Spring	60
【X2105】	博士論文演習 III B [各専任指導教員]	秋学期授業/Fall	61
【X2106】	博士論文演習 II A [浅川 希洋志]	春学期授業/Spring	61
【X2107】	博士論文演習 II B [浅川 希洋志]	秋学期授業/Fall	62
【X2108】	博士論文演習 III A [森村 修]	春学期授業/Spring	63
【X2109】	博士論文演習 III B [森村 修]	秋学期授業/Fall	64
【X2120】	博士ワークショップ I A [佐々木 一恵、岩川 ありさ]	春学期授業/Spring	65
【X2121】	博士ワークショップ I B [佐々木 一恵、岩川 ありさ]	秋学期授業/Fall	66
【X2122】	博士ワークショップ II A [佐々木 一恵、岩川 ありさ]	春学期授業/Spring	67
【X2123】	博士ワークショップ II B [佐々木 一恵、岩川 ありさ]	秋学期授業/Fall	68
【X2124】	博士ワークショップ III A [佐々木 一恵、岩川 ありさ]	春学期授業/Spring	69
【X2125】	博士ワークショップ III B [佐々木 一恵、岩川 ありさ]	秋学期授業/Fall	70

OTR500G1 - 001

国際文化研究 A

廣松 勲、田島 樹里奈

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3 領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコソボの専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み連ねる。加えて、本研究科において学位論文執筆に必要となる研究方法・手続きなどについても学ぶ。
 （*なお、扱われる「4 つのテーマ」についてその順序が前後する場合には、初回授業などにおいてその旨を学生に通知する。）

【到達目標】

- (1) 国際文化研究の広がり可能性を入門のレベルで理解できること。
- (2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること。
- (3) 大学院で研究を遂行する上での手続き・心得を理解できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。

- (1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が 1 本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
- (2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士 1 年生のレベルを基準まで引き上げること重要な点である。
- (3) 基礎文献は 1 本 20～30 ページ程度で、雑誌論文または書籍 1～2 章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
- (4) 授業 3 回を 1 セットとして、基礎文献を 1 本ずつ取り上げ討議する。当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。
- (5) 大学院における研究遂行のために、注意すべき手続き・心得などについても教示する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・自己紹介・関心紹介 ・文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。
2	テーマ 1：リサーチデザイン（第一回）	・大学院における学習・研究について解説する。 ・受講学生たちのこれまへの研究状況を確認する。
3	テーマ 1：リサーチデザイン（第二回）	・引き続き、大学院における学習・研究について解説する。 ・研究計画作成の重要性について意識を高める。
4	図書館ガイダンス（第三回）	・図書館員による図書館ガイダンスを利用しつつ、法政大学図書館を介した文献調査のイロハを学ぶ。
5	テーマ 2：言説分析（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
6	テーマ 2：言説分析（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
7	テーマ 2：言説分析（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
8	テーマ 3：フィールドワーク（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
9	テーマ 3：フィールドワーク（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
10	テーマ 3：フィールドワーク（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
11	テーマ 4：統計調査（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。

12	テーマ 4：統計調査（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
13	テーマ 4：統計調査（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
14	補足授業 まとめ	・これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読みこむことは当然ながら、それ以上に自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。

【テキスト（教科書）】

上記の方法によって選定された必読文献を用いる。

【参考書】

必要に応じて、指示する。

【成績評価の方法と基準】

4 つのテーマごとの課題提出（60%）と授業中の討論への貢献（40%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

大学院の本授業では授業改善アンケートを実施していないので、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出等は授業支援システムを通して行う。

【その他の重要事項】

修士課程 1 年は必ず履修すること。

【Outline and objectives】

This course introduces the foundations of the intercultural communication studies according to three domains of interdisciplinary research: multicultural interrelations, multiethnic coexistence and multicultural informatics.

国際文化研究 B

大嶋 良明、田島 樹里奈

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3 領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコソボの専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み連ねる。春学期の「国際文化研究 A」で修得した文献購読の力をさらに伸ばし、研究の方法論についての理解を深める。なお、今年度は本研究科で学位論文執筆に必要となる研究方法についても学ぶ。

【到達目標】

- (1) 国際文化研究の広がり可能性を入門のレベルで理解できること
- (2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。

- (1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が 1 本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
- (2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士 1 年生のレベルを基準まで引き上げることも重要な点である。
- (3) 基礎文献は 1 本 20～30 ページ程度で、雑誌論文または書籍 1～2 章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
- (4) 授業 3 回を 1 セットとして、基礎文献を 1 本ずつ取り上げ討議する。当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。
2	テーマ 1（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
3	テーマ 1（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
4	テーマ 1（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
5	テーマ 2（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
6	テーマ 2（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
7	テーマ 2（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
8	テーマ 3（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
9	テーマ 3（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
10	テーマ 3（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
11	テーマ 4（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
12	テーマ 4（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
13	テーマ 4（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。

これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を読み、自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。

【テキスト（教科書）】

上記の方法によって選定する必読文献を用いる。

【参考書】

必要に応じて、指示する。

【成績評価の方法と基準】

4 つのテーマごとの課題提出（60%）と授業中の討論への貢献（40%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

大学院の本授業では授業改善アンケートを実施していないので、特になし

【学生が準備すべき機器他】

課題提出等は授業支援システムを通して行う。

【その他の重要事項】

修士課程 1 年は必ず履修すること。

【Outline and objectives】

This course is the continuation of the spring semester, and is required for all the 1st year graduate students. It provides students with a general scope in three prominent research areas of this graduate school, and attempts to cultivate desirable views to encompass in such a broad cross-disciplinary environment.

国際文化共同研究 A

佐々木 一恵、田島 樹里奈

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・本科目は、研究科の3領域「異文化相関関係」、「多文化共生」、「多文化情報空間」が、今日的な研究課題のスコップの中で深く連関することを、テーマ設定、リサーチ等を共有しながら、自らの研究に取り込んでいくことを目指します。

【到達目標】

- ・上記のテーマを念頭に置きながら、受講者各自が修士論文にいたる年度の春学期にやるべき課題を行うこと（論文テーマの再認識、先行研究分析の方向性の確認、文献レビュー、修論の構成など）。
- ・既存の学問の枠組みを越えた学際的なアプローチを試みる。
- ・他の参加者の研究に関しても、一緒に考え、コメントをしていけるようになること。
- ・プレゼンテーション（研究発表）の作法、論文の引用や注の付け方などを修得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

- ・受講者の発表を中心に進めていきます。発表者はレジュメを作成し、授業内で発表を行い、出席者全員で討論していきます。
- ・発表者以外の受講生は、疑問点、意見を準備した上で、討論に参加してください。
- ・学期末の修士論文に関する発表に向けての進捗状況や、研究上の問題等を受講者と教員で共有していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	・本授業の進め方について ・発表のスケジュール立て ・受講者の研究の進捗状況の報告
2	論文作法演習	・論文の諸ルールに関して実習を交えた演習を行います。
3	発表	・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
4	発表	・講評と論文の書き方に関する指導 ・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
5	発表	・講評と論文の書き方に関する指導 ・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
6	発表	・講評と論文の書き方に関する指導 ・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
7	発表	・講評と論文の書き方に関する指導 ・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
8	中間のまとめ	・講評と論文の書き方に関する指導 ・学期末の発表会に向けての指導を行います。
9	発表	・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
10	発表	・講評と論文の書き方に関する指導 ・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
11	発表	・講評と論文の書き方に関する指導 ・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
12	発表	・講評と論文の書き方に関する指導 ・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
13	発表	・講評と論文の書き方に関する指導 ・受講者 1 名による発表 ・質疑応答
14	まとめ	・講評と論文の書き方に関する指導 ・学期末の発表会に向けての指導を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・発表者は、各自レジュメ、パワーポイント・スライド等を作成し、発表の準備を行う。
- ・修士論文の執筆を念頭に置き、「書くという行為」を積極的に行う。

- ・発表者以外の受講者は、可能な限り授業で討論できるよう、発表の内容に関する事柄を調べておく。さらに質問・コメント等を用意しておく。
- ・修士論文のより良い完成を目指すため、本授業を積極的に活用する。
- ・授業後に、指摘された点を見直したり、関連文献等を積極的に読んだりすることで、自分の視点を上げていく。

【テキスト（教科書）】

斉藤孝他『学術論文の技法』日本エディタースクール、2005 年。

【参考書】

授業において適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

発表 70 %

討論への参加度・貢献度 30 %

【学生の意見等からの気づき】

私語を注意するようにします。

【学生が準備すべき機器他】

辞書、パソコン等。

【その他の重要事項】

- 1) 受講者数により、発表の回数が増減することがあります。
- 2) 修士課程 2 年目の春学期の科目であることを、特に意識して運営していきます。従って、修士論文の基本方針等を固めていくことを念頭に置き進めていきます。
- 3) 発信していくことは、それだけでも意味があることです。それを意識し、同時に自分と異なった意見を受け入れていく姿勢を身につけます。
- 4) 優れた論文にするには、問題に取り組むだけでなく、より高い次元で自分の研究の意味を振り返り、問いかけていくことが必要です。是非、ある時点で立ち止まって考えてみてください。
- 5) 「論文を書く」というのは、自分の研究してきたことに自分自身で「区切りをつける」仕事でもあります。そのことを意識し、必要な文献等をしっかり読み込み、執筆に向けての準備をしてください。

【カリキュラム上の位置づけ】

修士課程の大学院生の必修の修士論文完成年度の前半に配当され、「国際文化研究 A、B」の延長線上で、かつ秋学期の「国際文化共同研究 B」の直前の科目です。この科目は修士 1 年目での研究の上に、いよいよ修士論文執筆を視野に入れる点で、極めて重要な意味を持ちます。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of knowledge and methodologies in three key areas of study - intercultural correlation studies, multiculturalism studies, and multicultural information space studies.

OTR600G1 - 004

国際文化共同研究 B

曾 士才、市岡 卓

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、修士論文の完成に向けて、受講する 2 年次の院生と教員で切磋琢磨する授業で、1 年次の「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」、2 年次春学期の「国際文化共同研究 A」の延長線上にある。

「共同研究」というと、通常は共通テーマのもと、複数人が分担しながらともに研究することを意味するが、この場合の「共同」には、修士論文作成という共通の課題に向けて、それぞれ知恵を出し合い、協力し合う意味が込められている。

研究科の 3 領域、すなわち「異文化相関関係」「多文化共生」「多文化情報空間」に目配りしつつ、自分の研究の位置づけや方法論などを他者のそれと比較し、再検証することを通して、より完成度の高い論文を目指す。

とりわけ、本研究科の特色である学際的思考を組み込んでいく。

【到達目標】

上記の「授業の概要と目的」を念頭に置き、受講者各自がそれに見合った修士論文を完成させることを、本科目の最大の到達目標とする。

一定の構成・分量と主張をもつ論文の執筆は、誰にとってもたやすいことではない。一人で悩んだり、壁にぶつかって立ち往生することなく、同様の課題に直面している他の受講生からアドバイスをもらい、この道の先輩である教員の体験を聴くことで、困難な作業を順調に進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文の進捗状況に関する受講者の発表を中心に進めていく。発表者はレジュメもしくはパワーポイントを作成して発表を行い、他の出席者からの疑問・意見・助言等をまじえ、全員で討論していく。

修士論文中間発表会、修士論文の提出を二つの大きな節目と捉え、それに向けての進捗状況や研究上の悩み・問題点を受講者・教員間で共有していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。
2	修士論文中間発表 (1)	発表者 1、2、3 による 1 回目の発表。 7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
3	修士論文中間発表 (2)	発表者 4、5、6 による 1 回目の発表。 7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
4	修士論文中間発表 (3)	発表者 7、8、9 による 1 回目の発表。 7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
5	修士論文中間発表 (4)	発表者 10、11、12 による 1 回目の発表。 7 月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
6	修士論文中間発表 (5)	発表者 13 による 1 回目の発表および発表者 1 による 2 回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
7	修士論文中間発表 (6)	発表者 2、3 による 2 回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
8	修士論文中間発表 (7)	発表者 4、5 による 2 回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。

9	修士論文中間発表 (8)	発表者 6、7 による 2 回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
10	修士論文中間発表 (9)	発表者 8、9 による 2 回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
11	修士論文中間発表 (10)	発表者 10、11 による 2 回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
12	修士論文中間発表 (11)	発表者 12、13 による 2 回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
13	論文提出前ディスカッション	修士論文提出を間近に控え、各自が直面している問題や課題について議論し、その解決策等を検討する。
14	まとめ	提出した修士論文を振り返り、反省会を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (1) 自分の発表時に与えられた質問・批判・助言などを参考にし、常に自分の論文の質を高めるよう努めること。
- (2) 他者の発表時に得られたヒントや着想を、常に自らの論文に活かし、質の向上をはかること。
- (3) 自分の研究テーマを常に頭の片隅におき、アイデアを遊ばせながら日常生活を送ること。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

自分の発表時の内容 40%、他者の発表時の貢献度 30%、平常点 30%を目安に、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

指導教員と連絡を密に取り、できるだけ早い時期から執筆に取りかかるよう指導する。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントなどを使って報告する場合は、パソコンを持参し、プロジェクターの準備をしておくこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to enhance participants' knowledge and methodologies in three key areas of study - intercultural correlation studies, multiculturalism studies, and multicultural information space studies.

At the end of the course, participants are expected to improve their interdisciplinary thinking and to write up the Master's thesis/the Research paper.

LIN500G1 - 101

多言語相関論 I A

栗飯原 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

さまざまな地域・言語圏の文化事象を読解・分析するための理論と実践方法を学ぶ。主にカルチュラル・スタディーズの議論に触れて、多岐にわたるトピックをカバーする。

【到達目標】

- ・文献を精読して学術的議論の理解を深め、独自の観点からディスカッションをおこなう力を身に付ける。
- ・個々の研究に理論や方法論を応用する力を養う。
- ・可能であれば英語文献にも挑戦し、英語の読解力を伸ばすことも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

指名された担当者が問題提起を含む報告をおこない、全体で討論する。その際、報告者はレジュメを作成して、担当箇所をまとめ、議論のポイントを整理しておくこと。発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨むようにする。
「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて、適宜変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方と取り上げる文献について説明。以下、各回で扱うテーマを記す。
第2回	カルチュラル・スタディーズとはなにか	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第3回	人種・エスニシティ (1)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第4回	人種・エスニシティ (2)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第5回	ジェンダー・セクシュアリティ (1)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第6回	ジェンダー・セクシュアリティ (2)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第7回	メディア (1)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第8回	メディア (2)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第9回	サブカルチャー (1)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第10回	サブカルチャー (2)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第11回	移動 (1)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第12回	移動 (2)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第13回	映画批評 (1)	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第14回	映画批評 (2) 春学期のまとめ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。 春学期で学んだ内容のまとめと復習。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次週のための準備と予習は必ず行うこと。
授業で扱う文献以外にも、その他の参考文献を積極的に読んでいくこと。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表（60％）、授業への貢献（40％）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
受講生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】

アフリカ文学、アフリカ地域研究
<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html>

【Outline and objectives】

This course aims to provide students with an overview of the theory and practice of cultural studies, covering a wide range of issues and topics. By the end of this course, students will have (1) an overall knowledge and understanding of current academic debates in this field, (2) confidence in expressing their own views orally and in written form, and (3) the ability to apply the theoretical framework to their own research projects.

多言語相関論 I B

栗飯原 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

さまざまな地域・言語圏の文化事象を読解・分析するための理論と実践方法を学ぶ。主にカルチュラル・スタディーズの議論に触れて、多岐にわたるトピックをカバーする。

【到達目標】

- ・文献を精読して学術的議論の理解を深め、独自の観点からディスカッションをおこなう力を身に付ける。
- ・個々の研究に理論や方法論を応用する力を養う。
- ・可能であれば英語文献にも挑戦し、英語の読解力を伸ばすことも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

指名された担当者が問題提起を含む報告をおこない、全体で討論する。その際、報告者はレジュメを作成して、担当箇所をまとめ、議論のポイントを整理しておくこと。発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨むようにする。「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて、適宜変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方と取り上げる文献について説明。以下、各回で扱うテーマを記す。
第 2 回	文化帝国主義（1）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 3 回	文化帝国主義（2）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 4 回	異文化/他文化理解（1）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 5 回	異文化/他文化理解（2）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 6 回	歴史の政治学（1）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 7 回	歴史の政治学（2）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 8 回	都市空間（1）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 9 回	都市空間（2）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 10 回	民族とはなにか（1）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 11 回	民族とはなにか（2）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 12 回	暴力と抵抗（1）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 13 回	暴力と抵抗（2）	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 14 回	秋学期のまとめ	秋学期で学んだ内容のまとめと復習。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

次週のための準備と予習は必ず行うこと。
授業で扱う文献以外にも、その他の参考文献を積極的に読んでいくこと。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表（60 %）、授業への貢献（40 %）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
受講生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】

アフリカ文学、アフリカ地域研究

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html>

【Outline and objectives】

This course aims to provide students with an overview of the theory and practice of cultural studies, covering a wide range of issues and topics. By the end of this course, students will have (1) an overall knowledge and understanding of current academic debates in this field, (2) confidence in expressing their own views orally and in written form, and (3) the ability to apply the theoretical framework to their own research projects.

LIN500G1 - 103

多言語相関論Ⅱ A

リービ 英雄

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多言語表現の分析能力と批評能力

【到達目標】

日本語文学および外国語文学における文化相関への理解を深め、理念のみならず、表現の最先端を形成している固有のテキストに対する分析の手法を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために重要であり、「DP3」の達成のために望ましい

【授業の進め方と方法】

言語表現特有の領域における国際理解を深めるために、他言語表現との相関を視野に入れながら、日本語文学のテキストをアメリカのニュー・クリティシズム等にもとづいた厳密な作品分析の手法によって考察する。たとえば大江健三郎、中上健次、在日朝鮮・韓国文学、1990年代以降の越境作家群などの諸作品の「世界性」を分析する。ジェイムズ・ボールドウィンやトニー・モリスをはじめとするアメリカのマイノリティ文学、英語と日本語の翻訳問題、英語文学における「ポストコロニアル」の出現によって変化した「西洋とアジア」の相関などをたどる。書きことばとしての千三百年の歴史を持つ日本語が、複数の他言語との比較が当然な時代に、どのように書かれ、どのように読まれるのか、読解を通して、言語文化としてのその将来の姿を模索する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	講義
2	越境と文学①	越境と文学 (バイリンガル作家たち等) 1
3	越境と文学②	越境と文学 2
4	越境と文学③	越境と文学 3
5	マイノリティ文学①	マイノリティ文学 (ボールドウィン黒人文学等) 1
6	マイノリティ文学②	マイノリティ文学 2
7	マイノリティ文学③	マイノリティ文学 3
8	日本文学と世界文学①	日本文学と世界文学 (安部公房等) 1
9	日本文学と世界文学②	日本文学と世界文学 2
10	日本文学と世界文学③	日本文学と世界文学 3
11	日本文学と世界文学④	日本文学と世界文学 4
12	文学の国際化①	文学の国際化 (翻訳と他言語化) 1
13	文学の国際化②	文学の国際化 2
14	コンクリュージョン	講義

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教員が勧める文学のテキストを読む。

【テキスト（教科書）】

内容に関連する日本と外国の小説と批評を教場で呈示。

【参考書】

特に指定はない

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：発表 50 %、平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

授業はすごく好評だと感じます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本文学、世界文学
<研究テーマ> マイノリティおよび越境文学のテキスト分析
<主要研究業績>
『星条旗の聞こえない部屋』講談社文芸文庫（2005 年）
『千々にくだけて』講談社（2005 年）
『越境の声』（岩波書店、2007 年）

【Outline and objectives】

Through detailed textual readings and interpretations, students will explore the theme of Japanese as a language of literary expression from an international perspective, one that includes comparisons with both Western and Asian texts.

LIN500G1 - 104

多言語相関論Ⅱ B

リービ 英雄

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多言語表現の分析能力と批評能力

【到達目標】

「越境」や「エクソフォニー」等、文学における文化、言語相関への理解をさらに深め、批評の様々な枠の中で固有のテキストに対する分析の手法を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP4」の達成のために重要であり、「DP3」の達成のために望ましい

【授業の進め方と方法】

言語表現特有の領域における国際理解を深めるために、他言語表現との相関を視野に入れながら、日本語文学のテキストをアメリカのニュー・クリティシズム等にもとづいた厳密な作品分析の手法によって考察する。たとえば大江健三郎、中上健次、在日朝鮮・韓国文学、1990年代以降の越境作家群などの諸作品の「世界性」を分析する。ジェイムズ・ボールドウィンやトニー・モリスをはじめとするアメリカのマイノリティ文学、英語と日本語の翻訳問題、英語文学における「ポストコロニアル」の出現によって変化した「西洋とアジア」の相関などをたどる。書きことばとしての千三百年の歴史を持つ日本語が、複数の他言語との比較が当然な時代に、どのように書かれ、どのように読まれるのか、読解を通して、言語文化としてのその将来の姿を模索する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	講義
2	越境と文学①	越境と文学 (多和田葉子等) 1
3	越境と文学②	越境と文学 2
4	越境と文学③	越境と文学 3
5	マイノリティ文学①	マイノリティ文学 (在日の文学等) 1
6	マイノリティ文学②	マイノリティ文学 2
7	マイノリティ文学③	マイノリティ文学 3
8	日本文学と世界文学①	日本文学と世界文学 (大江健三郎、中上健次等) 1
9	日本文学と世界文学②	日本文学と世界文学 2
10	日本文学と世界文学③	日本文学と世界文学 3
11	日本文学と世界文学④	日本文学と世界文学 4
12	文学の国際化①	文学の国際化 (ポストコロニアル文学等) 1
13	文学の国際化②	文学の国際化 2
14	コンクリュージョン	講義

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教員が勧める文学のテキストを読む。

【テキスト（教科書）】

内容に関連する日本と外国の小説と批評を教場で呈示。

【参考書】

特に指定はない

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：発表 50 %、平常点 50 %

【学生の意見等からの気づき】

授業はすごく好評だと感じます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本文学、世界文学
<研究テーマ> マイノリティおよび越境文学のテキスト分析
<主要研究業績>
『星条旗の聞こえない部屋』講談社文芸文庫（2005 年）
『千々にくだけて』講談社（2005 年）
『越境の声』（岩波書店、2007 年）

【Outline and objectives】

A detailed consideration of Japanese language literature through comparative textual analysis. Problems of translation will be explored, with the objective of achieving a realistic comprehension of the possibilities of literary expression in Japanese specific to the contemporary age.

多言語相関論Ⅲ A

輿石 哲哉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語と日本語の比較、英語と他の言語の比較等を通じて、言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。併せて英語の力もつけることも大切です。今年度は、英語の歴史を、他の言語と比較しながら学んでいきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語事象に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 英語の歴史について、他の言語の歴史と比較しながら学ぶこと。
- 4) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行います。担当者を事前に決め、その担当者の報告のもとに担当教員および他の受講者が討論をしていくことになります。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
- 2) 積極的に意見を出し合い討論していくこと、

の2点です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	英語史の研究と、このテキストの意義について学ぶ。	ここ最近の英語史の研究を概観しながら、テキストとして選んだ本について説明。今後のやり方を議論し、担当者の決定等を行う。
2	1.1 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
3	1.2 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
4	1.3 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
5	1.4 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
6	1.5 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
7	1.6 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
8	2.1, 2.2 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
9	2.3 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
10	2.4 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
11	2.5 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
12	2.6 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
13	2.7 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
14	2.8 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

まず、英語に習熟することが非常に重要です。従って、常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで上で、発表の準備を怠りなくすること。他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。

【テキスト（教科書）】

Lass, Roger (1987). *The Shape of English: Structure and History*. London and Melbourne: J.M.Dent & Sons Ltd.

【参考書】

以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。
・高橋作太郎（編集）。『リーダーズ英和辞典』。第三版。東京：研究社。
学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むのには必須です。
・Janssen, S. (ed.) (2014). *The World Almanac and Book of Facts 2015*. New York: The World Almanac Books.
・Philip's (2012). *Philip's Modern School Atlas*. (97th edition.) London: Philip's.

以上の2冊は、英語を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

報告、発表（50％）、討論への参加（50％）。場合によっては、小論文を課すこともあります（その場合、「討論への参加」に代えて、「小論文」が50％となります）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、スクリーン等を随時。

【その他の重要事項】

今回、教材として選んだのは、1987年に書かれた英語史の名著ですが、長らく絶版になっている本です。かなりレベルの高い本で、著者の Roger Lass の知識が凝縮された本となっています。英語史の本は、古英語、中英語等の時代区分に分けて記述されることが多いのですが、この本では、背景、外面史、音韻論、形態統語論等の言語学の部門ごとの章立てになっています。このような本をじっくり読むことで、英語史のみならず、言語学の考え方を再認識していきましょう。国際文化研究科のみならず、言語研究に興味のある他研究科の学生の履修も歓迎いたします。

【担当教員の専門分野等】

言語学、英語学（形態論、統語論、音声学）、英語史など。

【カリキュラム上の位置づけ】

言語・文化に関して、比較・対照するということを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は英語の歴史を中心に、このことを学んでいきます。）

【Outline and objectives】

The objective of this course is to get a general idea and concepts of contrastive linguistic studies.

Towards the end of this course, you should:

- become acquainted with how the English language has become as it is.
- become acquainted with how the structural aspects of English language can be described and explained.
- begin to develop a basic framework based on which contrastive linguistic studies can be made by yourself.

多言語相関論Ⅲ B

興石 哲哉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語と日本語の比較、英語と他の言語の比較等を通じて、言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。併せて英語の力もつけることも大切です。今年度は、英語の歴史を、他の言語と比較しながら学んでいきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語事象に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 英語の歴史について、他の言語の歴史と比較しながら学ぶこと。
- 4) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行います。担当者を事前に決め、その担当者の報告のもとに担当教員および他の受講者が討論をしていくことになります。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
- 2) 積極的に意見を出し合い討論していくこと、

の2点です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	2.9, 2.10 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第2回	2.11, 2.12 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第3回	3.1 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第4回	3.2.1, 3.2.2 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第5回	3.2.3, 3.2.4 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第6回	3.3 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第7回	3.4 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第8回	3.5, 3.6, 3.7 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第9回	3.8 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第10回	3.9 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第11回	3.10 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第12回	4.1, 4.2 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第13回	4.3.1, 4.3.2 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。
第14回	4.3.3 をじっくり読む。	担当者の発表から、関連トピックを議論、考察していく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

まず、英語に習熟することが非常に重要です。従って、常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで上で、発表の準備を怠りなくすること、他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。

【テキスト（教科書）】

Lass, Roger (1987). *The Shape of English: Structure and History*. London and Melbourne: J.M.Dent & Sons Ltd.

【参考書】

以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。
・高橋作太郎（編集）。『リーダーズ英和辞典』。第三版。東京：研究社。
学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むのには必須です。
・Janssen, S. (ed.) (2014). *The World Almanac and Book of Facts 2015*. New York: The World Almanac Books.
・Philip's (2012). *Philip's Modern School Atlas*. (97th edition.) London: Philip's.
以上の2冊は、英語を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

報告、発表（50％）、討論への参加（50％）。場合によっては、小論文を課すこともあります（その場合、「討論への参加」に代えて、「小論文」が50％となります）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、スクリーン等を随時。

【その他の重要事項】

今回、テキストとして選んだのは、1987年に書かれた英語史の名著ですが、長らく絶版になっている本です。かなりレベルの高い本で、著者の Roger Lass の知識が凝縮された本となっています。英語史の本は、古英語、中英語等の時代区分に分けて記述されることが多いのですが、この本では、背景、外面史、音韻論、形態統語論等の言語学の部門ごとの章立てになっています。このような本をじっくり読むことで、英語史のみならず、言語学の考え方を再認識していきましょう。国際文化研究科のみならず、言語研究に興味のある他研究科の学生の履修も歓迎いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 英語学、音声学、言語学

<研究テーマ> 英語の形態論を中心とする領域。

<主要研究業績>

Koshiishi, Tetsuya (2011). *Collateral Adjectives and Related Issues*. Bern: Peter Lang.

【カリキュラム上の位置】

言語・文化に関して、比較・対照するということを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は英語の歴史を中心に、このことを学んでいきます。）

【Outline and objectives】

The objective of this course is to get a general idea and concepts of contrastive linguistic studies.

Towards the end of this course, you should:

- become acquainted with how the English language has become as it is.
- become acquainted with how the structural aspects of English language can be described and explained.
- begin to develop a basic framework based on which contrastive linguistic studies can be made by yourself.

多文化相関論 I A

岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、イブ・コゾフスキー・セジウィックの著作を読み、フェミニズム、クィア批評の観点から、文学・文化テクストを読み解くための力を養う。前半では、『男同志の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（上原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001）の「序章」と「第1章 ジェンダーの非対称性と性愛の三角形」を読み、セジウィックのキーワードであるホモソーシャル概念について理解する。

後半では、『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀【新装版】』（外岡尚美訳、青土社、2018）を読み、近代西洋文化における、ホモセクシュアル／ヘテロセクシュアルに関する定義の非一貫性について批判的に検討する理論を学ぶ。ホモセクシュアリティについて、「本質主義的見解対構築主義的見解」ではなく、「マイノリティ化の」見解対「普遍化の（ユニヴァーサルイジング）」見解という用語を導入した点も、「ゲイ肯定的仕事」として、本書が重要な意義を持ち続けている理由である。本書を現在において読み直すことで、新たな理論的、思想的な視座を展望する。

【到達目標】

- (1) 共通テクストを精確に読み、具体例を示しながら、ディスカッションを行うことができる。
- (2) フェミニズムやクィア・スタディーズの理論や重要なトピックについての知識を身につけ、理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

・毎回、2名の発表者が、論点整理、具体的な事例の分析、ディスカッションのための問題提起を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要と計画、受講者の自己紹介、各章の説明、フェミニズム、クィア・スタディーズにおけるセジウィックのインパクトについて
第2回	ホモソーシャルと「男同志の絆」	セジウィック『男同志の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（名古屋大学出版会、2001）の「序章」を読みます。
第3回	ジェンダーの非対称性と性愛の三角形 (1)	セジウィック『男同志の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』「第1章 ジェンダーの非対称性と性愛の三角形」の前半を読みます。
第4回	ジェンダーの非対称性と性愛の三角形 (2)	セジウィック『男同志の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』の「第1章 ジェンダーの非対称性と性愛の三角形」の後半を読みます。
第5回	『クローゼットの認識論』(1)	「序論 公理風に」(pp.9-55)を全員で読んできて、本書の議論の前提について議論を行い、担当者を決定する。
第6回	『クローゼットの認識論』(2)	「序論 公理風に」(pp.55-94)
第7回	『クローゼットの認識論』(3)	「第1章 クローゼットの認識論」(pp.95-130)
第8回	『クローゼットの認識論』(4)	「第2章 二項対立論 (一)『ビリー・バット』—ホモセクシュアルのいなくなった後で」(pp.131-168)
第9回	『クローゼットの認識論』(5)	「第2章 二項対立論 (一)『ビリー・バット』—ホモセクシュアルのいなくなった後で」(pp.168-187)
第10回	『クローゼットの認識論』(6)	「第3章 二項対立論 (二) ワイルド、ニーチェ、男の身体をめぐるセンチメンタルな関係」(pp.190-223)
第11回	『クローゼットの認識論』(7)	「第3章 二項対立論 (二) ワイルド、ニーチェ、男の身体をめぐるセンチメンタルな関係」(pp.223-262)
第12回	『クローゼットの認識論』(8)	「第4章 クローゼットの野獣—ヘンリー・ジェイムズとホモセクシュアル・パニックの書」(pp.263-309)
第13回	『クローゼットの認識論』(9)	「第5章 プルーストとクローゼットの見せ物」(pp.311-369)
第14回	まとめ	まとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、登場する出来事や関連文献について調べた上で、議論を喚起する形で発表できるように準備する。
- ・受講者は、共通テクストを精確に読み、自分が気になった点については調べ、問題意識を持ちながら議論に参加できるようにすること。

【テキスト（教科書）】

イブ・コゾフスキー・セジウィック『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀【新装版】』外岡尚美訳、青土社、2018、定価 3,024 円。

【参考書】

『男同志の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（上原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001）。

Melville, Herman (1984). *Pierre, or, The ambiguities*; Israel Potter : his fifty years of exile ; The piazza tales ; The confidence-man : his masquerade ; Uncollected prose ; Billy Budd. New York: Library of America. (日本語訳は、ハーマン・メルヴィル『ビリー・バット』（坂下昇・訳、岩波文庫 赤 308-4、1976）、『ビリー・バット』（飯野友幸・訳、光文社古典新訳文庫、2012）など。

【成績評価の方法と基準】

担当回の発表 60%、期末レポート 40%で総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生が少ない中、能動的な参加があった。受講生の発表を補いながら、それぞれの研究に活かせるように授業を進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本現代文学、クィア・スタディーズ

<研究テーマ> 日本現代文学やサブカルチャーにおけるトラウマと記憶の研究
<主要研究業績>

・「境界の乗り越え方—多和田葉子『容疑者の夜行列車』をめぐって」『論叢クィア』5, pp. 82-102.

・「変わり身せよ、無名のもの—多和田葉子『献灯使』論」『すばる』40(4), pp.164-173.

・「前未来形の文学—小野正嗣『獅子渡り鼻』論」『現代思想』2019年3月臨時増刊号「総特集・ジュディス・バトラー」

【Outline and objectives】

This course aims at enabling students to acquire a broad range of knowledge about Feminism criticism and Queer reading. We will focus on the works of Eve Kosofsky Sedgwick. By the end of this course, students will develop a deeper understanding of the important issues regarding gender and sexuality. Coursework will include weekly reading of Epistemology of the Closet, (University of California Press: 1st edition, 1990) in Japanese translation.

多文化相関論 I B

岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱（新装版）』（竹村和子訳、青土社、2018[1990=2006]）を共通テキストとして、フェミニズム、クィア・スタディーズの基礎的な理論や知識について学ぶ。バトラーは、近年、「悲嘆可能性」や「不安定性」といった概念を鍵にして、特定の集団には社会的・経済的な支援のネットワークが欠落し、「あやうさ」が不均等に配分されているという議論を行っているが、これらの問題意識は、1990年に原著が刊行された『ジェンダー・トラブル』から引き継がれている。本講義では、現在の社会的な状況とも関連させながら、理論的な文献を自らの研究と繋ぐ視野を養う。

【到達目標】

- (1) フェミニズム、クィア・スタディーズの重要なトピックについての知識を身につける。
- (2) 共通テキストを精確に読み、具体例を示しながら、ディスカッションを行うことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

・毎回、2名の発表者が、論点整理、具体的な事例の分析、ディスカッションのための問題提起を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要と計画、受講者の自己紹介、各章の説明、フェミニズム、クィア・スタディーズにおけるバトラーのインパクトについて
第2回	講読とディスカッション(1)	「序文」を全員で読んできて、担当者を決定する
第3回	講読とディスカッション(2)	第1章「〈セックス／ジェンダー／欲望〉の主体」(1)(第1節、第2節)
第4回	講読とディスカッション(3)	第1章「〈セックス／ジェンダー／欲望〉の主体」(2)(第3節、第4節)
第5回	講読とディスカッション(4)	第1章「〈セックス／ジェンダー／欲望〉の主体」(3)(第5節、第6節)
第6回	講読とディスカッション(5)	第2章「禁止、精神分析、異性愛のマトリクスの生産」(1)(第1節、第2節)
第7回	講読とディスカッション(6)	第2章「禁止、精神分析、異性愛のマトリクスの生産」(2)(第3節、第4節)
第8回	講読とディスカッション(7)	第2章「禁止、精神分析、異性愛のマトリクスの生産」(1)(第5節)
第9回	講読とディスカッション(8)	第3章「攪乱的な身体行為」(1)(第1節)
第10回	講読とディスカッション(9)	第3章「攪乱的な身体行為」(2)(第2節)
第11回	講読とディスカッション(10)	第3章「攪乱的な身体行為」(3)(第3節、第4節)
第12回	講読とディスカッション(11)	「結論—パロディから政治へ」
第13回	『アセンブリー行為遂行性・複数性・政治』との接続	最新論集『アセンブリー行為遂行性・複数性・政治』との接続を行う。
第14回	まとめ	まとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・担当者は、本文で言及されている思想家や理論的背景について関連書籍や文献を調べた上で、議論を喚起する形で発表できるように準備すること。
・受講者は、共通テキストを精確に読み、自分が気になった点については調べ、問題意識を持ちながら議論に参加できるようにすること。

【テキスト（教科書）】

ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱（新装版）』（竹村和子訳、青土社、2018） 2,800円＋税

【参考書】

授業時にも紹介するが、特に関連して読んでほしいジュディス・バトラーの著作は以下の3冊。

『生のあやうさ—哀悼と暴力の政治学』本橋哲也訳、以文社、2007。原著 2004

『戦争の枠組み—一生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子訳、筑摩書房、2012。原著 2009

『アセンブリー行為遂行性・複数性・政治』佐藤嘉幸、清水知子訳、青土社、2018。原著 2015

・入門書

サラ・サリー、竹村和子ほか訳 2005.『ジュディス・バトラー』青土社。
藤高和輝 2018.『ジュディス・バトラー—生と哲学を賭けた闘い』以文社。

・雑誌での特集

『現代思想』34(12)。(2006年10月臨時増刊「総特集 ジュディス・バトラー 触発する思想」青土社)。

『現代思想』2019年3月臨時増刊号でも特集が組まれている。

・関連した論文

清水晶子 2006 「キリンのサバイバルのために—ジュディス・バトラーとアイデンティティ・ポリティクス再考」『現代思想 増刊』34(12), 171-187.

清水晶子. 2011. 「〈危機〉の配分—ジュディス・バトラー 「戦争の枠組み」『現代思想』39(9): 182-85.

【成績評価の方法と基準】

担当回の発表 60%、期末レポート 40%で総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生が少ない中、能動的な参加があった。受講生の発表を補いながら、それぞれの研究に活かせるように授業を進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本現代文学、クィア・スタディーズ

<研究テーマ>日本現代文学やサブカルチャーにおけるトラウマと記憶の研究
<主要研究業績>

・「境界の乗り越え方—多和田葉子『容疑者の夜行列車』をめぐって」『論叢クィア』5, pp. 82-102.

・「変わり身せよ、無名のもの—多和田葉子『献灯使』論」『すばる』40(4), pp.164-173.

・「前未来形の文学—小野正嗣『獅子渡り鼻』論」『現代思想』2019年3月臨時増刊号「総特集・ジュディス・バトラー」

【Outline and objectives】

This course aims at enabling students to acquire a broad range of knowledge about Feminism and Queer studies. We will focus on the works of Judith Butler. We will examine social issues through her important concept of “Grievability” and “Precarity”. By the end of this course, students will develop a deeper understanding of the important issues about gender and sexuality. Coursework will include weekly reading of Gender trouble: feminism and the subversion of identity(New York: Routledge, 2006 [1990]) in Japanese translation.

多文化芸術論 I

佐藤 千登勢

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、芸術テキストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その表現、表象の語る多義性と重層性について考え、議論します。ロシア（ソ連）、チェコ（チェコスロバキア）、ポーランドの文学作品や映画を用いながら、それぞれの国々の社会、経済、文化、歴史、国家間の勢力均衡を解説する作業を通して、多義的記号体系を分析・洞察する力を養います。

【到達目標】

映画作品や音楽を中心に、それぞれの芸術言語が担う審美的機能と社会批判の機能という一見相反する多義的な表現の読解を重ねることで、これを自身の見解や思考の組み立て方に役立てて、論理的に議論やプレゼンテーションを展開する力を獲得することが目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である。また、「DP3」の達成のために望ましい。

【授業の進め方と方法】

旧社会主義国家で創造された芸術テキストは、その国の文化や社会構造、イデオロギー、歴史的背景、国家間の関係を濃厚に映し出す、いわば、体制と人間社会の縮図モデルです。しかし、多義的で重層的な言語（映画言語、音楽言語を含む）により、それは、多様な解釈を許容するとともに、作者の真の意図やメッセージを解説すべき錯綜した迷宮のような作品となっていることも少なくありません。私たちは、手法や表象、形式といった審美的観点に着目すると同時に、《抑圧》《イデオロギーによる民族統合》《民族差別》《冷戦》《ソ連邦崩壊と離散》《ナショナリズム》といった社会学的・歴史的キーワードを基に、二重構造の芸術テキストを分析・批評していきます。授業でなされた議論や自身の見解を A4 一枚程度にまとめたリアクションペーパーを毎回、提出してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	芸術の機能について――シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ	ロシア・フォルマリズム宣言としても名高いシクロフスキーの『手法としての芸術』を基に、「異化＝自動化」「日常＝非日常」「手法＝素材」等の二項対立の芸術上の、また日常における意義を考える。
第 2 回	芸術の機能について――シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ（2）	ロシア・フォルマリズムの主導者シクロフスキーが提唱した「異化」の概念について具体例を確認しつつ、理解を深める。
第 3 回	煽動と挑発―― モンタージュ派（エイゼンシュテイン、ヴェルトフ）の映画（1）	エイゼンシュテイン『ストライキ』、『戦艦ポチョムキン』、『十月』の煽動的なモンタージュについて概説。
第 4 回	煽動と挑発―― モンタージュ派（エイゼンシュテイン、ヴェルトフ）の映画（2）	ヴェルトフの都市化と複製技術の発達を背景とした手法としてのモンタージュの差異を検討する。
第 5 回	プロパガンダー―― ブドフスキンの映画言語『アジアの嵐』	ブドフキン『アジアの嵐』における多様なモンタージュを分析して審美的側面を確認しながら、同時にこの作品が呈示する多民族併合や社会主義革命の正当化という多層的テーマを読み解く。
第 6 回	プロパガンダー―― トゥーリンの映画言語『トゥルクシブ』	プロパガンダの煽動性の記号や表象を現前化させずに、宗教的煽動とも言える超絶的力の存在と崇高さの創出、サブミナルの手法によるプロパガンダの力を分析していく。
第 7 回	面従腹背の二重構造―― エイゼンシュテイン『イワン雷帝』	エイゼンシュテインの世界的影響力を配下におくためにスターリンが制作依頼した『イワン雷帝』。この作品にはスターリンを批判・揶揄する記号や表象、表現が構造化されている。作品をめぐるスターリンとエイゼンシュテインとの闘争という背景も交えつつ、概説。

第 8 回	面従腹背の二重構造―― アンジェイ・ワイダの映画言語（1）	旧ソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は映画界でも不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、本人のインタビュー映像も交えて確認すると同時に、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。
第 9 回	面従腹背の二重構造―― アンジェイ・ワイダの映画言語（2）	旧ソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は映画界でも不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、本人のインタビュー映像も交えて確認すると同時に、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。
第 10 回	審美的《イソップ言語》―― タルコフスキー『鏡』	幼年時代の回想的要素とドキュメンタリー映像が印象的な『鏡』。だが、幼年期の断片的回想にはスターリン時代の粛清のエピソードがさまざまな様式で重ねられている。象徴性や映画言語の二重性に着目しつつ、『父性の喪失』についても考えていく。
第 11 回	抵抗と挑発―― ヴェラ・ヒティロヴァの映画言語	旧チェコスロバキアの統制から自由になろうとする国民の意志を、二人の自由闊達な姉妹を通してユーモラスにお洒落に描出するセンスと、映画言語の二重性、台詞と映像の不一致や台詞の重みについて考察。
第 12 回	寓話的諷刺と不条理―― シャフナザーロフ『ゼロ・シティ』	旧ソ連という国家のしくみ自体をパロディ化した不条理作品の秀作『ゼロ・シティ』を基に、ソ連崩壊後の映画言語の変容に着目する。
第 13 回	寓話的諷刺不条理―― アブラーゼ『懺悔』	ソ連邦崩壊後、ロシアの映画言語は寓話性を獲得する。スターリンとヒトラーを融合させたような支配者、彼に両親を粛清された少女と、支配者の一族のその後の経緯は、史実とシュールな感覚やユーモアを交えて表現される。その寓話的表象に着目しつつ、史実、記憶、不条理について考察していく。
第 14 回	国家と個人―― パーヴェル・チュフライ『パバつてなに？』	ソ連崩壊後のロシア国民のメンタリティを、『父親』に裏切られた義理の息子のある一家族のストーリーに重ね合わせた寓話的手法とその重みについて検討しつつ、『父殺し』の伝統についても考察。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業での概説、院生間での議論、自身の見解等を A4 一枚程度にまとめたリアクションペーパーを次週回毎に毎回提出する。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は利用しない。教員の作成した資料を毎回配付する。

【参考書】

参考書は指定しないが、適宜、参考となる資料を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

討論への貢献（50％）とリアクションペーパー（50％）の基準に基づき評価する。

【学生の意見等からの気づき】

とくにありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

20 世紀ロシア文学、ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論、ロシア（ソ連）の映画と文学の相関性について、ロシア（ソ連）映画

【主要研究業績】

『DVD で愉しむロシアの映画』（東洋書店、2005 年）
『シクロフスキー 規範の破壊者』（南雲堂フェニックス、2006 年）
『映画に学ぶロシア語』（東洋書店、2008 年）

【Outline and objectives】

In this course, we will analyze and interpret the motion pictures of Russia and Eastern Europe from the point of view of an Aesopian language, allegorical representation, metaphor, camera work, and the historical and political background of each of the countries. The basic concepts: fascism, totalitarianism, discrimination, suppression, ethnicity and minority.

多文化芸術論Ⅱ

廣松 勲

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

複数文化に跨る社会文化的現象を分析するために、この授業では「カナダ・ケベック州」と「カリブ海域諸島のフランス海外県」という、2つの「フランス語圏（フランコフォニー）」に注目する。いずれの地域もアメリカ大陸の一部であり、当然ながら「英語圏（アングロフォニー）」とも密接に関わる地域である。

これらの地域の芸術作品は、作品の形式的側面に集中した「内在分析」だけではとらえ切れない豊饒な問題系を抱えている。そのため、文学・映画テキストに「社会学的なテキスト分析」を施すことで、テキストとコンテクストとの独特の繋がりを、各地域の芸術作品において分析する。

このような具体的な作品分析を行うために、事前に各地域の社会文化的・言語学的状況を紹介することになる。

【到達目標】

この授業では、複数の言語・文化が併存する地域において生産される芸術作品（主に文学と映画）を分析対象として、いかに社会文化的現象が芸術作品に書き込まれるのかを検討する。

とりわけ、英語文化とフランス語文化が併存する「カナダ・ケベック州」、そしてフランス語文化とクレオール語文化が併存する「カリブ海域諸島」を中心にしつつ、学生には文学・映画テキストの「社会学的なテキスト分析」の方法を身に付けてもらうことを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

基本的には、日本語による講義を行う。ただし、受講者には各テーマまたは作品について、個人発表を一度してもらう。最終的に、その発表を基にした期末レポートを提出してもらう。

なお、個人発表・期末レポートについては、フランスまたはフランス語圏に少しでも関連させるならば、自らの研究テーマに即した発表を行うこともできる（比較分析など）。

さらに、毎回の授業においてコメントシートを提出してもらうことで、学生の理解度・考えなどを把握しておきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：フランス語圏とは何か？	「フランコフォニー」や「アングロフォニー」の歴史・地理
第2回	カリブ海域諸島のフランス語圏①	カリブ海域諸島の社会文化的・言語学的状況
第3回	カリブ海域諸島のフランス語圏②	エメ・セゼールの長編詩『帰郷ノート』
第4回	カリブ海域諸島のフランス語圏③	エドゥアール・グリッサンの小説『レザルド川』
第5回	カリブ海域諸島のフランス語圏④	パトリック・シャモワゾーの小説『素晴らしきソリボ』
第6回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑤	カリブ海域諸島の思想
第7回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑥	カリブ海域諸島の映画：『マルチニクの少年』
第8回	カナダ・ケベック州のフランス語圏①	カナダ・ケベック州の社会文化的・言語学的状況
第9回	カナダ・ケベック州のフランス語圏②	ジャック・ゴドブーの小説『やあ、ラルノー』
第10回	カナダ・ケベック州のフランス語圏③	エミール・オリヴィエの小説『パッサージュ』（邦訳なし）
第11回	カナダ・ケベック州のフランス語圏④	ダニー・ラフェリエール的小説『吾輩は日本作家である』
第12回	カナダ・ケベック州のフランス語圏⑤	カナダ・ケベック州の思想
第13回	カナダ・ケベック州のフランス語圏⑥	カナダ・ケベック州の映画『ブレイキング・ゴップス』
第14回	総括	社会と芸術とのつながり方

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本講義で扱う文学作品については、1作を除いて、全て邦訳が存在する。受講生には、できるだけ翻訳文献にも触れておいて欲しい。
・授業で扱うアメリカ大陸のフランス語圏については、それぞれ自分自身でも社会状況などを事前に調べておいて欲しい。

【テキスト（教科書）】

・特になし。

・毎回資料を配布します。

【参考書】

・平野千香子著『フランス植民地主義の歴史』人文書院、2002年。
・鳥羽美鈴著『多様性のなかのフランス語』関西学院大学出版会、2012年。
・秋田茂著『イギリス帝国の歴史』中公新書、2012年。
・井野瀬久美恵著『興亡の世界史 大英帝国という経験』講談社学術文庫、2017年。

【成績評価の方法と基準】

・コメントシート、口頭発表、レポート、授業への積極的貢献度（出席など）を考慮して、総合的に判断する。

・評価配分は、以下の通り：

- ①平常点：10%
- ②個人発表：30%
- ③期末レポート：60%

【学生の意見等からの気づき】

・主に講義科目ではあるが、できるだけ学生が自らの考え・反応などを講義中に述べられるような雰囲気づくりに努めたい（個人発表に加えて、コメントシートを材料にした議論など）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランコフォニー文学

<研究テーマ> 脱植民地化以後のメランコリー、トランスカルチャー等

<主要研究業績> "Mélancolie postcoloniale : relecture de la mémoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Patrick Chamoiseau et Émile Ollivier" (モントリオール大学提出博士論文)

【Outline and objectives】

This course introduces the foundations of literature of French speaking world (especially in the Americas) to students taking this course. They can learn also the methodology of literary research while reading literary text and social context at the same time.

異文化社会論Ⅱ A

浅川 希洋志

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際社会で生きるとき、私たちは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということを考えるとき、私たちは異文化に見られる行動様式や思想を理解することが国際社会における他者理解のすべてであると考える傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。

本授業では、文化心理学や心理人類学に関わる文献（特に、河合隼雄著『日本文化のゆくえ』、東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』、恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』、斎藤環著『ひきこもり文化論』等）を読み解きながら、心の働きと文化の関連性について学んでいく。

【到達目標】

心の働きと文化の関連性、特に家庭でのしつけや学校教育が子どもたちに何を期待し、そのような期待と文化の間にはどのような関連があり、そのような期待を内在化した教育システムの中で、子どもたちがどのような心の働きを身につけていくのか、を理解する。また、私たちが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能（心の働き）がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もありうる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第1章「『私』さがし」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第7章「異文化体験の軌跡」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	東洋『日本人のしつけと教育』第1章「意欲の構造」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	東洋『日本人のしつけと教育』第2章「役割社会と受容的動機性」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	東洋『日本人のしつけと教育』第3章「内在モデルとしての『いい子』」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	東洋『日本人のしつけと教育』第4章「『気持ち』への関心」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	東洋『日本人のしつけと教育』第5章「滲み込み型のしつけと教育」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	東洋『日本人のしつけと教育』第6章「道徳意識と道徳判断」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
10	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第1章「リサの疑問」、第2章「かくれたカリキュラム」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第3章「集団の中の個人」、第4章「小さな選民たち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
12	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第5章「キング先生の戦い」、第6章「内なるアメリカ、内なる日本」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。

- 13 『ひきこもり文化論』第4章「学生報告にもとづき、クラス討論を行う章『『甘え文化』と『ひきこもり』—比較文化的考察』を読む
- 14 授業の総括 授業のまとめを行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備しておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるよう準備しておく。

【テキスト（教科書）】

- ①河合隼雄著『日本文化のゆくえ』（岩波書店、2000年）
- ②東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』（東京大学出版会、1994年）
- ③恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』（中公新書、1992年）
- ④斎藤環著『ひきこもり文化論』（ちくま学芸文庫、2016年）

【参考書】

必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

「評価基準」：（1）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（2）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。

「配分（%）」：討論への参加（50%）＋担当日の発表（50%）

【学生の意見等からの気づき】

受講生が自身の研究を発展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ポジティブ心理学、文化心理学

<研究テーマ> （1）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（2）文化と心理機能の関連性について

<主要研究業績>

『フロー理論の展開』世界思想社（2003年）、『フロー経験の諸側面』島井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006年）、“Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?” Journal of Happiness Studies（2010年）、『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造』学文社（2011年）、「楽しさと最適発達の現象学—フロー理論」鹿毛雅治編『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版（2012年）、『クリエイティビティ』チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016年）。

【Outline and objectives】

In this seminar, students will explore issues related to culture and psychological functioning by reading more like anecdotal books and articles, and discuss how culture shapes psychological processes of people. Each student's own experiences they have had in different cultures will be welcomed to deepen class discussions. One of the main objectives of this seminar is to understand how educational practices in a culture are intended to bring up children as culturally desired and also expected adults through the educational process of the culture.

異文化社会論ⅡB

浅川 希洋志

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

異文化社会論ⅡAでは文化の違いから生じる教育システムの違いやそれによって培われる心のあり方に関する文献を読み、心の働きと文化の関連について考察していくが、本授業ではそのような「文化と心」にまつわる事象を文化心理学の枠組み、つまり文化心理学における理論として捉えなおすことを主たる目的とする。授業では、北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』、リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』等をテキストとして用い、掘り下げた議論の必要なトピックスに関しては適宜、英語論文を含めた原著にあたっていく。また、授業全般を通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを考えていく。

【到達目標】

心の働きと文化の関連性を文化心理学の枠組みの中で捉えることができる。特に、Markus & Kitayama が提唱した文化的自己観のモデルに注目し、人々の持つ文化的自己観が彼らの認知、感情、モチベーションなどどのように関連しているのかが理解できること。また、授業で扱ったトピックスを通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もありうる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第1章「古代ギリシャ人と中国人は世界をどう捉えたか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第2章「思考の違いが生まれた社会的背景」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第3章「西洋的な自己と東洋的な自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第4章「目に映る世界のかたち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第5章「原因推測の研究から得られた証拠」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第6章「世界は名詞の集まりか、動詞の集まりか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第7章「東洋人が論理を重視してこなかった理由」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第8章「思考の本質が世界共通でないとしたら」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
10	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第2章「自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。

11	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第3章「感情」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
12	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第4章「欧米における自己高揚と日本における自己批判」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
13	ディスカッション	授業で扱った文化心理学的知見が、受講者の修士論文のテーマを発展させる上で、何らかの新しい視点を与え得るものだったかどうかを討論する。
14	授業の総括	授業のまとめを行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備しておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるよう準備しておく。

【テキスト（教科書）】

①北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』（共立出版、1998年）
②リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』（ダイヤモンド社、2004年）

【参考書】

必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

「評価基準」：（1）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（2）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。

「配分（%）」：討論への参加（50%）＋担当日の発表（50%）

【学生の意見等からの気づき】

受講生が自身の研究を発展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ ポジティブ心理学、文化心理学

＜研究テーマ＞（1）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（2）文化と心理機能の関連性について

＜主要研究業績＞

『フロー理論の展開』世界思想社（2003年）、『フロー経験の諸側面』島井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006年）、“Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?” Journal of Happiness Studies（2010年）、『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造』学文社（2011年）、『楽しさと最適発達現象学—フロー理論』鹿毛雅治編『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版（2012年）、『クリエイティビティ』チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016年）。

【Outline and objectives】

This is a continuation of the seminar from the spring semester. In the spring semester, students read more like anecdotal books and articles relevant to issues of culture and psychological functioning. However, in the autumn semester, this seminar will read more theory-oriented books and articles in cultural psychology and try to understand relevant issues with a theoretical frame work of cultural psychology. Main topics of this seminar will be on how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships. In addition, what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies will be argued throughout the course.

ナショナリズム／エスニシティ論 A

中島 成久

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インドネシアにおける「先住民」論について検討する。国際的な **Indigenous People** という概念がインドネシアにおいていかに理解され、NGO/住民サイドと政府行政サイドではいかに異なったものを前提に議論されてきたかを分析し、特にスハルト時代から始まった開発の時代における「先住民」概念のずれを学ぶ。それにより、世界における先住民問題の複雑さを学ぶ。

【到達目標】

- 1 インドネシアにおける「先住民」概念の歴史を学ぶ
- 2 スハルト時代の開発政策、特にアブラヤシ開発について学ぶ
- 3 インドネシアにおける先住民である、オラン・リンバの現状を土地権、アブラヤシ開発、抵抗などのトピックについて学ぶ
- 4 開発と先住民問題への視野を広げる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

担当者による講義とテキスト講読、儒コ社による発表を中心に授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の趣旨説明、授業計画の説明、受講者の自己紹介、担当順番の確認
第 2 回	インドネシアにおける先住民概念①	AMAN(インドネシア先住民連盟)に結成
第 3 回	インドネシアにおける先住民概念②	アブラヤシ開発と先住民問題
第 4 回	インドネシアにおける先住民概念③	「森の民」オラン・リンバについて
第 5 回	先住民問題に関する受講者の発表①	この課題について受講者の理解と発展についてプレゼンする
第 6 回	受講者の発表②	この課題について受講者の理解と発展についてプレゼンする
第 7 回	受講者の発表③	この課題について受講者の理解と発展についてプレゼンする
第 8 回	受講者の発表④	この課題について受講者の理解と発展についてプレゼンする
第 9 回	受講者の発表⑤	この課題について受講者の理解と発展についてプレゼンする
第 10 回	テキスト講読①	The Revival of Tradition in Indonesian Politics 第 1 章
第 11 回	テキスト講読②	The Revival of Tradition in Indonesian Politics 第 2 章
第 12 回	テキスト講読③	The Revival of Tradition in Indonesian Politics 第 6 章
第 13 回	テキスト講読④	The Revival of Tradition in Indonesian Politics 第 1 2 章
第 14 回	テキスト講読⑤	The Revival of Tradition in Indonesian Politics 第 1 5 章

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 テキストの予習と復習、関連文献の講読
- 2 自分の研究の関心領域を深めること
- 3 批判力の養成

【テキスト（教科書）】

The Revival of Tradition in Indonesian Politic, edited by Davidson and Henley, Routledge, 2007

【参考書】

随時紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）

【学生の意見等からの気づき】

留学生の日本語能力について配慮する

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学

<研究テーマ>インドネシア研究

<主要研究業績>

Nakashima, N Exclusion of Nias Squatters and Expansion of Oil Palm Plantation,

JIES No 32, 2018

『インドネシアの土地紛争』創成社新書、2011 年

【Outline and objectives】

Understanding the difference between Indigenous People of the definition of UN and Indonesia will bring students to have an idea of how it is difficult to understand the Indigenous People in the world.

CUA500G1 - 202

ナショナリズム／エスニシティ論B

中島 成久

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インドネシアにおける土地紛争の研究という観点から授業を行う。インドネシアにおける共有地権の本質を理解し、インドネシア独立後法的二元性と国家統一のはざまの中で、共有地権がいかに篡奪されていったかを確認し、国家と開発の問題への理解を深める。

【到達目標】

- 1 インドネシアにおける共有地権について、オランダ植民地時代からインドネシア独立、スハルトの開発時代、それに改革時代の中での位置づけを学ぶ。
- 2 インドネシアの独立とナショナリズム、開発主義の実態を学ぶ。
- 3 インドネシアにおける「先住民」の位置づけと、国際的な理解とのギャップについて学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

テキスト講読と受講者による発表

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業内容の説明
第2回	インドネシアの共有地権①	『インドネシアの土地紛争』に基づいた講義①
第3回	インドネシアの共有地権②	『インドネシアの土地紛争』に基づいた講義②
第4回	土地権をめぐる紛争①	Land and Development in Indonesia 講読① 第1章
第5回	土地権をめぐる紛争②	Land and Development in Indonesia 講読① 第2章
第6回	土地権をめぐる紛争③	Land and Development in Indonesia 講読② 第7章
第7回	土地権をめぐる紛争④	Land and Development in Indonesia 講読③ 第10章
第8回	土地権をめぐる紛争⑤	Land and Development in Indonesia 講読④ 第14章
第9回	受講者の発表①	課題について受講者の理解を深め発展させるプレゼン①
第10回	受講者の発表②	課題について受講者の理解を深め発展させるプレゼン②
第11回	受講者の発表③	課題について受講者の理解を深め発展させるプレゼン③
第12回	受講者の発表④	課題について受講者の理解を深め発展させるプレゼン④
第13回	受講者の発表⑤	課題について受講者の理解を深め発展させるプレゼン⑤
第14回	受講者の発表⑥	課題について受講者の理解を深め発展させるプレゼン⑥

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 テキストを熟読し、批判的に検討する
- 2 関連する文献を調べ、自分の研究との異同を把握する
- 3 新たな研究領域の可能性を追求する

【テキスト（教科書）】

中島成久『インドネシアの土地紛争』創成社新書

Land and Development in Indonesia, edited by McCarthy and Robinson, ISEAS Publishing, 2016

【参考書】

随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加 (50 %) + 発表 (50 %)

【学生の意見等からの気づき】

留学生の日本語力の把握を行い、テキストの選択や理解に注意を払う

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 文化人類学

<研究テーマ> インドネシアの土地紛争の研究

<主要研究業績>

N Nakashima, Expulsion of Nias Squatter and Expansion of Oil Palm Plantation, JIES No 32, 2018

『インドネシアの土地紛争』創成社新書、2011

【Outline and objectives】

This class focus on the topic of Land Conflicts in Indonesia. The communal land right is essential for the Indonesia people, however, the right has been nearly denied by the Indonesia government with development policy under Suhart, and caused a lot of land disputes. The study of communal land right will lead us understand how those people have been situated today.

マイノリティ社会論 A

曾 士才

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①アメリカやイギリスにおける中国系移民集団、②トランスカルチュラリズム概念に基づく移民研究、③ホスト社会での共生の可能性と課題、以上 3 点について分析し、理解を深める。

【到達目標】

中国系移民を主たる事例にマイノリティとしての移民集団の社会と文化、特に定着後のアイデンティティについての知見の獲得を目標にしている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

グローバリゼーションのもと、国際的規模の移民現象が近代以降見られるようになった。その特徴は個人が主体となって国境を越えて移動する点にある。本授業では、四大移民の一つである中国系移民について、移住の経緯、移住先である欧米におけるコミュニティの形成、第二世代以降のアイデンティティの変化、ホスト社会での民族共生などについて考察したい。今学期は、中国系移民の辿った歴史とともに、定着後の祭りや料理をテーマに、日系移民と比較しながら、考察したい。具体的には選定したテキストの講読と討論を織り交ぜて授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義 1 イントロダクションを兼ねて	グローバリゼーションと国際移民
第 2 回	講義 2	トランスカルチュラリズム、エスニック文化主義
第 3 回	講義 3	米国における中国系、日系移民の歴史
第 4 回	講読と討論 1-1	イエローフェイス、異教徒、苦力
第 5 回	講読と討論 1-2	第三の性、不服従の市民
第 6 回	講読と討論 1-3	モデル・マイノリティ
第 7 回	講読と討論 1-4	米国生まれのチャプスイ、日本生まれのフォーチャー・クッキー
第 8 回	講読と討論 1-5	ハワイの中国系のエスニック・フェスティバル
第 9 回	小括と考察	米国における中国系移民やその集団の社会と文化について整理する
第 10 回	講読と討論 2-1	ハワイ沖縄系コミュニティ、オキナワ・フェスティバル、エスニック・フード
第 11 回	講読と討論 2-2	ハワイの沖縄系移民、先住民系文化との交差
第 12 回	講読と討論 2-3	ハワイのオキナワ料理の創造
第 13 回	講読と討論 2-4	ハワイのアメラジアン
第 14 回	まとめと考察	ハワイにおける日系移民やその集団の社会と文化について整理するとともに、中国系移民、日系移民の比較分析を試みる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。授業日程と講読する論文名のリストは初回の授業で配布する。

【テキスト（教科書）】

配布プリント

【参考書】

江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店 1998 年
S. カースルズ/M. J. ミラー『国際移民の時代（第 4 版）』名古屋大学出版会 2011 年
白水敏彦編『移動する人びと、変容する文化—グローバリゼーションとアイデンティティ』お茶の水書房 2008 年
貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波新書 2018 年
ロバート・G. リー（貴堂嘉之訳）『オリエンタルズ：大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』岩波書店 2007 年

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加 70 %、期末レポート 30 %。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化人類学、中国民族学

＜研究テーマ＞華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ

＜主要研究業績＞

「日本残留中国人—札幌華僑社会を築いた人たち」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、2016 年

『落地生根—神戸華僑と神阪中華会館の百年—増補版』研文出版、2013 年（中華会館編、共著）

「華僑の民俗信仰」宮本袈婆雄・谷口貢編著『日本の民俗信仰』八千代出版、2009 年

「在日華人社会の民俗文化」山下清海編『華人社会がわかる本—中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』明石書店、2005 年

【Outline and objectives】

This course deals with the history of Chinese migrant in the United States and their acculturation. It also deals with the history and acculturation of Japanese migrant in the United States.

At the end of the course, participants are expected to (1) obtain basic knowledge about maturing of migratory movement, (2) enhance the basic concept of transculturalism and ethnic culturalism.

CUA500G1 - 204

マイノリティ社会論B

曾 士才

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

①現国民国家と少数民族、先住民族、②マイノリティの文化とアイデンティティ、以上 2 点について分析し、理解を深めていく。

【到達目標】

現代世界とエスニシティを読み解く知見と力を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP3」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

フランス革命後に誕生した国民国家がその後世界中に広まるなか、国家権力を握った強大な民族へ従属する地位に追いやられた少数民族集団は、不平等な状況下で、差別や偏見にさらされながらも、自らの文化の維持継承を図り、アイデンティティを追求してきた。今学期は、前半は綾部恒雄の説くエスニシティ概念と世界における先住民問題について概観する。後半では、アメリカ合衆国と中国における「再活性化運動」（revitalization movement）の事例に関するテキストを読みながら、受講者と議論し、考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義 1 イントロダクションを兼ねて	エスニシティ概念について
第 2 回	講義 2	先住民問題の現状と課題
第 3 回	講義 3	アメリカ合衆国と中国における民族概況
第 4 回	講読と議論 1	米国の少数民族の事例①：イロクオイ、セミノールとミゴスーキー
第 5 回	講読と議論 2	米国の少数民族の事例②：ラコタ・スー、シャイアン
第 6 回	講読と議論 3	米国の少数民族③：プエブロ、ナバホ
第 7 回	講読と議論 4	中国の少数民族①：エヴェンキ族、オロチョン族
第 8 回	講読と議論 5	中国の少数民族②：シヨオ族、トゥチャ族
第 9 回	講読と議論 6	中国の少数民族③：ミャオ族、満族
第 10 回	講読と議論 7	米国の再活性化運動①：ゴーストダンス
第 11 回	講読と議論 8	米国の再活性化運動②：ペヨテ・カルト
第 12 回	講読と議論 9	中国の再活性化運動①：ミャオ族の集団改宗
第 13 回	講読と議論 10	中国の再活性化運動②：ミャオ族の英雄塑像建造運動
第 14 回	講義とまとめの議論	先住民族と再活性化運動

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。授業日程と講読する論文名のリストは初回の授業で配布する。

【テキスト（教科書）】

テーマごとにプリントを配布

【参考書】

参考書・参考資料等

綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂 1993 年

綾部恒雄編『アメリカの民族：ルツボからサラダボウルへ』弘文堂 1992 年
末成道男、曾士才編『世界の先住民族：ファースト・ピープルの現在 01 東アジア』明石書店 2005 年

富田虎男、スチュアートヘンリ編『世界の先住民族：ファースト・ピープルの現在 07 北米』明石書店 2005 年

A.F.C.Wallace, "Revitalization movements," in American Anthropologist, New Series 58 : 1956

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加 70 %、期末レポート 30 %。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学、中国民族学

<研究テーマ>

華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ

<主要研究業績>

「中国貴州省における生態博物館の二〇年」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス—中国南部地域の分析から』風響社 2016 年

「西南中国のエスニック・ツーリズム」鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶応義塾大学出版会、2009 年

『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）

「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリティクス—中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年

『世界の先住民族—ファースト・ピープルの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts of nation-state and ethnic minority. It also deals with revitalization movement among ethnic groups in the United States and Mainland China. At the end of the course, participants are expected to (1) obtain basic knowledge about indigenous people of the United States and China, (2) enhance the concept and theory of ethnicity.

多言語社会論A

大中 一彌

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・西ヨーロッパや北アメリカや日本といった、いわゆる先進国における移民の地位を念頭に、それらの移民の出身国と移民先の諸社会をつなぐ絆について考察する。
- ・使用言語は日本語とする。フランス語能力は求めない。

【到達目標】

・移民社会の一典型とされる現代フランスの移民問題について修士課程レベルにおける基礎的な知識を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・教科書の講読
- ・学生の発表（履修者数により変更する場合がある）
- ・折に触れて、関連する時事問題等の解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
①	イントロダクション	授業計画の説明、テキストの入手方法、授業支援システムへの自己登録
②	テキストの講読とディスカッション	到達目標の設定（宿題） 教科書 ix-xxi 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
③	テキストの講読とディスカッション	教科書 3-10 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
④	テキストの講読とディスカッション	教科書 11-24 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑤	テキストの講読とディスカッション	教科書 25-33 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑥	テキストの講読とディスカッション	教科書 33-43 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑦	テキストの講読とディスカッション	教科書 43-52 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑧	テキストの講読とディスカッション	教科書 52-62 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑨	テキストの講読とディスカッション	教科書 62-73 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑩	テキストの講読とディスカッション	教科書 77-85 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑪	テキストの講読とディスカッション	教科書 86-95 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑫	テキストの講読とディスカッション	教科書 96-105 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑬	テキストの講読とディスカッション	教科書 96-118 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑭	まとめ	到達目標の自己評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・受講にあたって特に予備知識は求めないが、この授業で扱った素材と、参加者各自の研究の関連について日ごろから考えることが望ましい。
- ・毎回の教科書の範囲については、予習が求められる。
- ・「今週のフランス」については、授業内で説明する。

【テキスト（教科書）】

ジェラルール・ノワリエル『フランスという坩堝（るつぼ）』法政大学出版局、2015 年。

【参考書】

授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・授業内における報告に対する評価、議論への参加
- ・上記のような平常のコースワークを重視しているため、期末の試験やレポート提出といった課題は課さない。
- ・各評価項目間の比率としては、平常点 (30%) と議論への参加 (30%)、授業内報告 (40%) を想定している。

【学生の意見等からの気づき】

本研究科のカリキュラム編成は、大学院生にとってきわめてハードなものとなっている。そのことを念頭においたうえで授業を進めたい。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムを用いるので、学期冒頭に各院生に自己登録をしてもらう。

【その他の重要事項】

- ・学外の方でこの科目のみの聴講を希望する方は、科目等履修生としてご参加下さい。詳しくは法政大学大学院にお問合せ下さい。
- ・法政大学国際文化学部 の学生は、この授業で単位履修できます。詳しくは『履修の手引き』をご覧ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

政治学、政治思想

<研究テーマ>

近現代フランスを中心とする階級

<主要研究業績>

「移民社会の論じ方 - ジェラルール・ノワリエルにおける記憶と歴史 -」

『思想』(1096) 171-187 2015 年 8 月。

「自発的隷従とは何か - ラ・ボエシー『反一者論（コントラン）』をめぐって」
細井保編著『20 世紀の思想経験』法政大学現代法研究所叢書 35 32-73 頁 2013 年 3 月。

「パスカルにおける情念と政治 - アルチュセール研究の視点から -」

『思想』岩波書店 1033 51-75 2010 年 5 月。

『フランスという坩堝』

ジェラルール・ノワリエル (担当:共訳)

法政大学出版局 2015 年 9 月。

【Outline and objectives】

This course aims to explore the phenomenon of international migration with a focus on the history of immigration in France since the 19th century. Through this course, students will discover not only characteristic traits that illustrate the historical evolution of France but will also discover that the framework for analyzing the social integration of immigrants differs from one country to another. In this course, the student is expected to be prepared and to actively discuss the readings.

ARSa500G1 - 207

多言語社会論 B

大中 一彌

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・西ヨーロッパや北アメリカや日本といった、いわゆる先進国における移民の地位を念頭に、それらの移民の出身国と移民先の諸社会をつなぐ絆について考察する。
- ・使用言語は日本語とする。フランス語能力は求めない。

【到達目標】

・移民社会の一典型とされる現代フランスの移民問題について修士課程レベルにおける基礎的な知識を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・教科書の講読
- ・学生の発表（履修者数により変更する場合がある）
- ・折に触れて、関連する時事問題等の解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
①	イントロダクション	授業計画の説明、テキストの入手方法、授業支援システムへの自己登録
②	テキストの講読とディスカッション	到達目標の設定（宿題） 教科書 119-130 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
③	テキストの講読とディスカッション	教科書 130-140 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
④	テキストの講読とディスカッション	教科書 147-160 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑤	テキストの講読とディスカッション	教科書 160-168 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑥	テキストの講読とディスカッション	教科書 169-180 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑦	テキストの講読とディスカッション	教科書 180-190 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑧	テキストの講読とディスカッション	教科書 190-217 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑨	テキストの講読とディスカッション	教科書 223-232 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑩	テキストの講読とディスカッション	教科書 232-245 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑪	テキストの講読とディスカッション	教科書 246-257 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑫	テキストの講読とディスカッション	教科書 257-268 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑬	テキストの講読とディスカッション	教科書 269-284 頁 今週のフランスについてコメントする（教員&学生）。
⑭	まとめ	到達目標の自己評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・受講にあたって特に予備知識は求めないが、この授業で扱った素材と、参加者各自の研究の関連について日ごろから考えることが望ましい。
- ・毎回の教科書の範囲については、予習が求められる。
- ・「今週のフランス」については、授業内で説明する。

【テキスト（教科書）】

ジェラルール・ノワリエル『フランスという垣塙（るつば）』法政大学出版社、2015 年。

【参考書】

授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点、授業内における報告に対する評価、議論への参加
- ・上記のような平常のコースワークを重視しているため、期末の試験やレポート提出といった課題は課さない。
- ・各評価項目間の比率としては、平常点 (30%) と議論への参加 (30%)、授業内報告 (40%) を想定している。

【学生の意見等からの気づき】

本研究科のカリキュラム編成は、大学院生にとってきわめてハードなものとなっている。そのことを念頭においたうえで授業を進めたい。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムを用いるので、学期冒頭に各院生に自己登録をしてもらう。

【その他の重要事項】

- ・学外の方でこの科目のみの聴講を希望する方は、科目等履修生としてご参加下さい。詳しくは法政大学大学院にお問合せ下さい。
- ・法政大学国際文化学部の子生は、この授業で単位履修できます。詳しくは『履修の手引き』をご覧ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

政治学、政治思想

<研究テーマ>

近現代フランスを中心とする階級

<主要研究業績>

「移民社会の論じ方 - ジェラルール・ノワリエルにおける記憶と歴史 -」

『思想』(1096) 171-187 2015 年 8 月。

「自発的隷従とは何か - ラ・ボエシー『反一者論（コントラン）』をめぐって」
細井保編著『20 世紀の思想経験』法政大学現代法研究所叢書 35 32-73 頁 2013 年 3 月。

「パスカルにおける情念と政治 - アルチュセール研究の視点から -」

『思想』岩波書店 1033 51-75 2010 年 5 月。

『フランスという垣塙』

ジェラルール・ノワリエル (担当:共訳)

法政大学出版社 2015 年 9 月。

【Outline and objectives】

This course aims to explore the phenomenon of international migration with a focus on the history of immigration in France since the 19th century. Through this course, students will discover not only characteristic traits that illustrate the historical evolution of France but will also discover that the framework for analyzing the social integration of immigrants differs from one country to another. In this course, the student is expected to be prepared and to actively discuss the readings.

多民族共生論 I A

松本 悟

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業のテーマは「開発と少数民族」である。主に開発途上国の先住民族を取り上げる。「開発」が先住民族を初めてする少数民族の生活や考え方にどのような影響を与えてきたのかを文献から読み取り、学際的な視点から共生のあり方を考え議論する。

【到達目標】

- (1) 民族とは何か、先住民族とはどのような人々を指すのか、論点を説明できるようにする。
- (2) 近代以降の「開発」が少数民族や先住民族に与えた影響を分析する切り口を身につける。
- (3) 当該分野の専門的な文献（日本語と英語）を読んで理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

概要：多民族共生論は理論や手法が確立した学問分野というよりは、多民族が共生する社会の有様を考察する「問題指向型の学問領域」である。したがって、扱う問題はほとんどの場合「正解」が存在しないので、思考や議論を求められる授業となる。

方法：院生は毎回の課題文献（主に日本語、場合によっては英語）を読んで授業に臨み、1人が発表者となって議論を行う。なお他の受講生は課題文献で重要だと考えた点を授業支援システムを通して事前に提出すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	春学期の授業の狙いを説明し、院生の関心を開き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	民族とは	民族の定義と虚構性について議論する。
3	先住民族（先住民）とは	先住民族とはどのような人々を指すのかを理解し考える。
4	開発と先住民族	開発学や人類学におけるこのテーマの研究動向についてレビューし議論する。
5	先住民族人口	先住民族はどのように数えられているのか。統計の困難さの含意を考える。
6	先住民族と貧困	貧困の定義を通じて先住民族の貧困を考える。
7	先住民族と教育	タイとグアテマラを例に言語を含めた教育が先住民族社会に及ぼす影響について考える。
8	先住民族と資源	タイの「森の民」カレン民族とエコツーリズムを通じて資源に対する先住民族の権利について考える。
9	先住民族と政治	民族の「先住性」が政治的に利用された例を通して、民族間の分断について考える。
10	先住民族と医療	開発途上国での感染症の発生源を探ることで医療と先住民族について考える。
11	先住民族と定住化	先住民族の定住化政策がもたらした生活の変化について考える。
12	先住民族と開発費難民	よりよい生活のために行われる開発が「避難民」を生み出す例から先住民族にとっての開発の意味を考える。
13	先住民族から見た現代世界	現代の視点で先住民族を見るのではなく、先住民族からの視点で現代社会を見ることで開発の意味について考え直す。
14	総合討論	授業を通して読んだ文献を横断的に分析し、開発と民族を考える際に重要な切り口について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

課題文献は必ず読んでくること。それを前提に授業を行う。担当となった院生は課題文献をもとに論点の発表を準備すること。他の受講生は課題文献で重要だと考えた点を授業支援システムを通して事前に提出すること。日本語と英語の文献を対象とするが、院生の母語及び第一外国語を考慮して発表の担当を検討する。

【テキスト（教科書）】

英語と日本語の文献を授業支援システムを通じて配布。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

課題文献の発表が 80%、授業における討議への参加度を 20%として総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

- ・少数民族が暮らす東南アジアの開発現場に長く関わっている教員が、自らの経験をもとに課題文献や発表者へのコメントを行う。
- ・受講生の人数や語学力によって課題文献は柔軟に対応する予定である。また受講生の研究に関する議論も柔軟に組み入れる予定である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞国際開発研究

＜研究テーマ＞影響評価、国際組織、開発援助、NGO

＜主要研究業績＞

『調査と権力』（単著、東大出版会、2014 年）

『NGO と世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）

『人々の資源論』（共著、明石書店、2008 年 9 月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005 年 9 月）

【Outline and objectives】

The Theme of this course is "development and ethnic minorities" particularly, indigenous people in the lower and middle income countries (so-called developing countries). It focuses on impacts of "development" on their livelihoods and their ways of thinking.

多民族共生論 I B

松本 悟

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は「先住民族と国際規範」をテーマとし、国際連合や国際開発機関、民間銀行の国際協会などの宣言や政策が形成された過程やその実効性を批判的に読み解きながら、先住民族など多民族が共生できる国際社会に向けた規範のあり方を考える。

【到達目標】

- (1) 先住民族の権利を守る国際規範の形成史を説明できる。
- (2) 実際の規範がどのように実務に適用されているかを批判的に分析できる。
- (3) 当該分野の専門的な文献を読んで要点を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

事前の課題文献を中心に授業を行う。毎回の担当者は課題文献をもとに論点を発表し、それをもとに議論をファシリテートする。他の受講生は課題文献で重要だと考えた点を授業支援システムに事前に提出する。毎回の授業は、担当者の発表、論点に関する討議、教員による補足講義からなる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙いを説明し院生の関心を聞き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。発表の担当者を決める。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	民族について	春学期の多民族共生論 IA の復習を兼ねて民族という概念について考える。
3	国際規範の形成	国際社会の規範がどのように作られるのかを考える。
4	世界銀行と先住民族	世界銀行の先住民族政策についてその妥当性を議論する。
5	世界銀行の事例（1）	第4回の授業で扱った政策が実際のプロジェクトでどのように順守されているのか（いないのか）を考える。
6	世界銀行の事例（2）	先住民族政策に違反していると判断されたプロジェクトについてドキュメント分析をして考える。
7	国連の先住民族権利宣言	国連で採択された先住民族権利宣言について議論する。
8	FPIC 原則	先住民族の権利を守る国際規範で重視される「自由で事前に十分な情報が提供された上での合意」(FPIC) について考える。
9	国連の先住民族権利宣言への反応	宣言に対するアフリカ各国の反応を通して、先住民族の権利をめぐる論点を議論する。
10	国際金融公社の政策	民間企業を支援する世銀グループの IFC の政策をもとに民間支援の場合のリスクを考える。
11	赤道原則	世界中の民間金融機関で作る赤道原則協会を通して民間企業の規範形成について国際機関との対比をしながら考える。
12	Watch Dog NGO	国際規範の順守を監視する国際 NGO について考える。
13	日本の民族意識	全体のテーマからは少しそれるが、日本において（先住）民族がどう語られてきたかを考える。
14	総合討論	授業で読んだ文献を横断的に捉えなおし、先住民族の権利を守るための国際規範を考える視点について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回授業の前に課題文献を出すので、必ずそれを読んだ上で授業に出席すること。発表者は課題に沿ってレジュメを作成すること。他の受講生は課題文献から考えた重要な点を事前に授業支援システムに投稿すること。

【テキスト（教科書）】

毎回授業支援システムから提供する。

【参考書】

松本悟（2014）『調査と権力』東京大学出版会。

松本悟編（2003）『被害住民が問う開発援助の責任』築地書館。

Luis Felipe Duchicela, Svend Jensby, Jorge Uquillas, Jelena Lukic, and Karen Sirker, 2015, Our People, Our Resources Striving for a Peaceful and Plentiful Planet, World Bank Group.

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%、授業での発表 40%、討議への参加度 30%をベースとして総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムを活用する。発表ではパワーポイントを使用してもよい。

【その他の重要事項】

- ・国際金融機関の先住民族政策を含むセーフガード政策の改善を働きかける活動に NGO 職員として関わっていた教員が、その経験を発表へのコメントや補足講義に活かす。
- ・受講生の研究テーマ、人数、語学力に応じて授業内容を柔軟に変更する予定である。受講予定者は第1回授業に必ず出席すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際機構論、国際協力学

<主要研究業績>

『調査と権力』（単著、東京大学出版会、2014 年）

『NGO から見た世界銀行』（編著、ミネルヴァ書房、2013 年）

『映画で学ぶ国際関係 II』（共著、法律文化社、2013 年）

『人々の資源論』（共著、明石書店、2008 年 9 月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005 年 9 月）

【Outline and objectives】

The theme of this course is indigenous people and international norms. It will enable students to critically understand the historical development and the application for the projects of international norms to protect indigenous peoples' rights in relation to not only international development cooperation but also international finance or foreign investment.

多民族共生論Ⅱ A

高柳 俊男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「多民族共生論Ⅱ」は、春学期と秋学期で学ぶ内容を変えている。
春学期のⅡ Aでは、朝鮮やアジアと関係の深い日本人個人に関する伝記的著作を読んで、アジアをめぐる近現代日本の思想や社会運動の潮流を振り返っている（秋学期のⅡ Bは、在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察）。これまで、鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次・土田正昭を扱ってきたが、今年度は50歳の手習いで朝鮮語を学び、自らの詩に朝鮮語を交えたり、韓国の国民的詩人尹東柱の紹介に努めた、詩人の茨木のり子（1926～2006年）を祖上に載せる。
①茨木のり子という一個人の歩んだ道や、その中で身につけた思想・ものの見方を知る
②茨木のり子や彼女と関わりのあった他の人物を通して、近現代日本の社会・思想・文化などの潮流をたどる
③とくに、アジアとの関わりの中で、どのような社会運動・思想潮流があったかに着目する
④学術論文とは異なる特定の個人の個人史の中から、追究すべき課題を見出し、調査・探求する
⑤これまでの各人の研究や関心に応じて、受講者相互間に有益な討論を成立させる

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。
具体的には、歴史の中を生きる個人の伝記的記述を読むことを通して、日本近代史をアジアとの関わりの中で再検証するための契機をつかめるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP3」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

今回テキストとするのは、茨木のり子に関する評伝である。ただし、研究書ではないため注や文献リストは付されていないし、緻密に時代を追いながら書かれているわけでもない。導入のあと、この本の内容を学術的に補充しながら、1回につきほぼ2章ずつのペースで読み進めていく。
レポーターの報告と全員の討論により、ゼミのような形で進める。レポーターは、登場する人物や事件などの事象のうち、大切と思われる点や関心のある点を中心に事実調べをし、授業で議論すべき論点を提出すること。近年格段に検索が容易になった各種のデータベースを駆使し、関連する当時の新聞・雑誌記事などにも目配りをしながら、時代を実証的に再現するように努めることが大事である。
受講者が少ない場合は、負担が極端に多くなることを避け、レポーター無しで進める回も設ける。
また、関連する映像を観る回も、数回入れる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入（その1）	受講者各自の自己紹介、授業計画の解説、参考文献の紹介などのガイダンス。
第2回	導入（その2）	年譜や各種新聞記事などを使いながら、茨木のり子の伝記的な事項をあらかじめ整理する。
第3回	導入（その3）	茨木のり子に関する高柳執筆の文章を読む。
第4回	関連映像の上映①	関連人物として、谷川俊太郎の映像を鑑賞する。
第5回	テキスト第1章	本書全体の導入部
第6回	テキスト第2～第3章	愛知県での生い立ちから高等学校時代。母の実家の山形県庄内地方のこと
第7回	テキスト第4～第5章	戦時下の生き方
第8回	関連映像の上映②	沢知恵の歌による「りゅうりえんれんの物語」をCD鑑賞する。
第9回	テキスト第6～第7章	戦後の詩作活動の開始と、関係の深い同人たち
第10回	テキスト第8～第9章	60年安保とアジアとの関わり・戦争責任。金子光晴のこと
第11回	テキスト第10～第11章	『詩のころを読む』とハングル学習の開始
第12回	テキスト第12～第13章	本書全体のまとめ
第13回	関連映像の上映③	劇『蜜柑とユウウツ―茨木のり子異聞』をDVD鑑賞する（前編）。

第14回 関連映像の上映④
劇『蜜柑とユウウツ―茨木のり子異聞』をDVD鑑賞する（後編）。
半年間の学びの総括も。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業中に指示する関連文献の講読、関連映像視聴、関連箇所への訪問など。

【テキスト（教科書）】
後藤正治『清冽―詩人茨木のり子の肖像』（中央公論新社、2010年）

【参考書】
茨木のり子の詩集として、『茨木のり子集：言の葉』（筑摩書房）『茨木のり子全詩集』（花神社）などがある。また、本学図書館には、没後に群馬県立土屋文明記念文学館と世田谷文学館でそれぞれ開催された回顧展の図録を収蔵しているので、参照すること。
そのほか、本書のなかで登場する他の著述家たちの著書を、適宜あたってみること。

【成績評価の方法と基準】
レポーター時の報告30%、普段の授業への貢献度40%、学期末に提出する授業総括報告書30%を目安とし、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
例年、少人数の授業のため、「授業改善アンケート」非実施科目だが、私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。
近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じるような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究
＜研究テーマ＞
在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。
＜主要研究業績＞
・「渡日初期の尹学準―密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第5号論文編、2004年）
・「短歌と在日朝鮮人―韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第26号、2007年）
・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために―国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪 IIDA』機関誌『学輪』第2号、2016年）
＊詳細は、「学術データベース」をご参照のこと

【Outline and objectives】
This class aims to study about the trends of contemporary Japanese thought and social movements over Asia, by reading of a biographical work on Japanese individual closely related to Korea. In this year, we read the book on Noriko Ibaraki.

HIS500G1 - 211

多民族共生論ⅡB

高柳 俊男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察する。
- ①在日朝鮮人（総称）が経てきた歴史を明らかにする
 - ②政治史や運動史のみならず、生活史・文化史・精神史の解明に重点を置く
 - ③それらを通じて、日本における朝鮮民族との民族間関係の諸相を考察する
 - ④在日朝鮮人の事例をもとに、他の民族間関係について考える際の視点を養う
 - ⑤一次資料を含めた文献の調査や読解に関してレベルアップを図る

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。

具体的には、在日朝鮮人の経てきた道とその日本社会との関わりを、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解し、受け売りや図式的把握ではなく、自らの言葉で具体的・実証的に語れるようにすることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP3」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

秋学期のこの授業では、日本社会に大きな比重を占める「異民族集団」である在日朝鮮人を素材に、日本における異文化摩擦や多民族共生の姿を具体的に考察している。2006 年度以来、日本語雑誌『まだん』、稀有な記録である金鶴泳日記、在日朝鮮人の言論人として活躍した金達寿や李進熙の自伝などを素材に、考察を進めてきた。

2012 年度からは数年計画で、戦後、各種の民族団体・政党・社会運動団体ないし日本政府関係機関などが出した朝鮮関係のパンフレット・小冊子を読み解きながら、戦後の朝鮮・在日朝鮮人をめぐる論調や運動の系譜を追う作業を始めている。取り上げるべきテーマは、戦後初期の在日朝鮮人運動、都立時代も含めた民族学校、朝鮮戦争、北朝鮮帰国事業、祖国自由往来運動、朝鮮高校生への襲撃、日韓条約、外国人学校法案、出入国管理法、金嬉老事件、日立就職差別事件と民間連運動、韓国民主化運動、金大中拉致事件、在日韓国人政治犯、指紋押捺拒否運動、各種の国籍条項撤廃運動などがある。

容易に想像がつくように、これらのパンフレットは、ある時期における特定の団体の認識や主張を色濃く反映した産物である。その内容を正確に読み解くとともに、それらを「当時」と「現在」という2つの文脈の中に置いて、客観的で学術的に分析していく。すなわち、なぜこのような主張がなされたか、「当時」の背景を明らかにすると同時に、「現在」の目から見た認識の歪みや、その問題がその後どう推移したかも視野に入れて考察する。

特定の時代や課題に関する具体的な資料を読むことになるので、戦後の日本史や、戦後在日朝鮮人史に対する一定の通史的な理解があることが望ましい（なければ、授業と並行してそれを得るよう自分で努めること）。

授業の進め方としては、関連小冊子（1 回につき 30 頁前後）を、レポーターの報告と全員の討論で読んでいく（受講者が少なければ、レポーター無しの場合あり）。

関連映像の視聴も、適宜織りまぜたい。

昨年度は、1970 年代の韓国民主化運動への連帯や在日韓国人政治犯問題、NHK に朝鮮語講座を要望する署名運動などに関するものを読んだ。

この作業の開始から 8 年目で、おそらく最終年となる今年度は、1970 年代から 80 年代に関する内容、具体的には丸正事件、指紋押捺拒否運動、朝鮮人 BC 級戦犯、北朝鮮と日本共産党との関係などに関する文献を順次読み進めていくことになろう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入（その 1）	受講者の自己紹介、授業計画の解説、当面のテキスト配付、など。
第 2 回	導入（その 2）	1970～80 年代の在日朝鮮人と日本社会についての概況を確認する。
第 3 回	丸正事件（その 1）	丸正事件に関する文献の講読（その 1）
第 4 回	丸正事件（その 2）	丸正事件に関する文献の講読（その 2）
第 5 回	関連映像の上映①	当該時期の在日朝鮮人に関する映像の視聴
第 6 回	指紋押捺拒否運動（その 1）	指紋押捺拒否に関する文献の講読（その 1）
第 7 回	指紋押捺拒否運動（その 2）	指紋押捺拒否に関する文献の講読（その 2）
第 8 回	指紋押捺拒否運動（その 3）	指紋押捺拒否に関する文献の講読（その 3）
第 9 回	関連映像の上映②	指紋押捺拒否の映像視聴
第 10 回	朝鮮人 BC 級戦犯（その 1）	BC 級戦犯に関する文献の講読（その 1）

第 11 回	朝鮮人 BC 級戦犯（その 2）	BC 級戦犯に関する文献の講読（その 2）
第 12 回	北朝鮮と日本共産党との関係（その 1）	北朝鮮と日本共産党との関係に関する文献の講読（その 1）
第 13 回	北朝鮮と日本共産党との関係（その 2）	北朝鮮と日本共産党との関係に関する文献の講読（その 2）
第 14 回	関連映像の上映③	BC 級戦犯、北朝鮮と日本共産党との関係に関する映像視聴

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

後掲参考書および授業中に指示する関連文献の講読、関連映像視聴、関連箇所への訪問など

【テキスト（教科書）】

その都度コピーを用意する。

【参考書】

朴慶植『解放後在日朝鮮人運動史』（三一書房）、梶村秀樹『解放後の在日朝鮮人運動』（神戸学生青年センター出版部、1980 年）、ほかの関連書

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告 30 %、普段の授業への貢献度 40 %、および学期末の授業総括報告書 30 %を目安に、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

例年、少人数の授業のため、「授業改善アンケート」非実施科目だが、私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。

近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じるような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究、日朝関係史

<研究テーマ>

在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。

<主要研究業績>

・「渡日初期の尹学準—密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第 5 号論文編、2004 年）

・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第 26 号、2007 年）

・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪 IIDA』機関誌『学輪』第 2 号、2016 年）

* 詳細は、本学の「学術研究データベース」をご参照

【Outline and objectives】

This class aims to study about Japanese multicultural coexistence, by reading of the pamphlets on Japan-Korea relations or Korean minority in Japan.

国際ジャーナリズム論

神林 毅彦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主に次の点に関して議論し、学ぶ

1) 国内メディア、海外メディアの報道の分析、比較、また、ソーシャルメディアが及ぼす影響、2) 外交とジャーナリズム、3) 国際報道における政治的、経済的、社会的影響

【到達目標】

変化し続ける現代の情報環境と国際報道の現状、そして、問題点に関して、論理的に説明する。単に受動的に情報を受け取るのではなく、積極的に情報を収集でき、かつ、効果的な情報発信も行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

海外メディアが報じる日本、また、日本、海外メディアの国際報道を検証しながら、ジャーナリズムの本来の役割、また問題点などについて議論する。また、国際ニュースとなる要素、その機能、影響についても議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ジャーナリズムの役割
第2回	メディアの特性（Ⅰ）	国際ニュースとなる要素
第3回	メディアの特性（Ⅱ）	国際報道と国際問題
第4回	メディアの特性（Ⅲ）	国際報道の影響、ジャーナリズムの倫理問題
第5回	国内メディアの報道、問題	記者クラブ、男性優位、クロスオーナiership
第6回	国際ジャーナリズム（Ⅰ）	アジア諸国との関係と報道
第7回	国際ジャーナリズム（Ⅱ）	領土問題に関する報道
第8回	国際ジャーナリズム（Ⅲ）	歴史問題に関する報道
第9回	国際ジャーナリズム（Ⅳ）	経済、貿易問題と報道
第10回	国際ジャーナリズム（Ⅴ）	原発輸出、原発問題に関する報道
第11回	フィールドワーク	インタビュー、取材
第12回	国際ジャーナリズム（Ⅵ）	環境問題と報道
第13回	国際ジャーナリズム（Ⅶ）	難民問題と報道
第14回	国際ジャーナリズム（Ⅷ）	今後の国際報道、課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

さまざまな国際報道に目をつけ、客観的な批評をしてみる。直近のニュースに関して、報道の仕方、背景などを周囲の人と話し合う。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

ビル・コヴァッチ、トム・ローゼンステール『ジャーナリズムの原則』日本経済評論社 2002年（原書 The Elements of Journalism）
The Christian Science Monitor, The New York Times, The Financial Times, Independent Web Journal, Xinhua News Agency, Yonhap News, NHK

【成績評価の方法と基準】

平常点 70%、レポート（内容評価） 30%

【学生の意見等からの気づき】

以前は、授業で配布する記事、資料、また、授業中に扱う海外の報道番組は英文がほとんどだったが、学生の英語力に個人差があるため、日本語の記事、資料を増やしている。
映画監督や福島原発事故避難者とのインタビューなどは積極的に参加していた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ジャーナリズム論

<研究テーマ>国際ジャーナリズム論、ジャーナリズム倫理

<主要研究業績>国内外メディアでの出版記事多数

【Outline and objectives】

1) A comparison of news coverage in Japanese and foreign media, Impact of social media, 2) Foreign policy and journalism, 3) Political, economic and social factors influencing media content

国際文化交流論Ⅱ A

木村 真

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、さまざまな形態の人の移動が地域社会やさまざまな人間集団に与えた影響を考察します。人の移動は近現代の世界に限られた現象ではありませんが、とくに、19世紀以降の国民国家形成過程、都市化や近代化の過程、世界各地の紛争のなかで見られた出稼ぎ、国外・国内移住、強制的な住民交換、政治的亡命などの移動現象と人々のネットワーク、人々の帰属意識、さらに国家による政策の関係に注目します。それによって、現代社会で生じている多様な、多面的な移動現象の理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

- ①国民国家形成過程の人の移動について、多面的な理解を修得すること
- ②住民交換政策の地域社会に与える影響についての知見を得ること
- ③人々の多様な形態の移動にともなう送り出し地域、受け入れ地域の人々の文化的影響に関する知見を得ること
- ④以上のテーマについて、とくに歴史研究や地域研究の方法を学ぶこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

近代バルカン、東欧の事例を中心に担当者が講義も行いますが、受講者全員で関連文獻、論文を読み、発表をしてもらいます。また、受講者の専門地域もしくは関心を持つ地域の事例について報告発表もしてもらう予定です。各授業の内容について質問、意見をリアクションペーパーの形で提出してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方について
第2回	近代の東欧、バルカン社会（1）	東欧、バルカン地域における国民国家形成以前の人の移動
第3回	近代の東欧、バルカン社会（2）	帝国内の各地、ならびに帝国内外を結ぶさまざまな人の移動
第4回	国民国家形成過程と人の移動（1）	バルカン地域における国民国家形成のプロセス
第5回	国民国家形成過程と人の移動（2）	国家形成にともなう人の移動（武装勢力、軍隊、住民移動など）
第6回	国民国家形成過程と人の移動（3）	国家形成にともなう人の移動（出稼ぎ、季節労働など）
第7回	国民国家形成過程と人の移動（4）	国家形成にともなう人の移動（労働移民など）
第8回	国民国家形成過程と人の移動（5）	国家形成にともなう人の移動（亡命など）
第9回	紛争と人の移動（1）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（住民交換）
第10回	紛争と人の移動（2）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（強制移住）
第11回	紛争と人の移動（3）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（難民）
第12回	移動する人々の帰属意識（1）	帰属意識の構築
第13回	移動する人々の帰属意識（2）	重層的な帰属意識
第14回	人の移動をめぐる研究から得られる知見	人の移動をめぐる歴史学的な研究アプローチの可能性と限界

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告発表に際しては、あらかじめ、関連する文献を読み、レジュメを作成準備することを求めます。また、発表者以外の参加者も、関連する概念、事象などについて調べることを期待します。

【テキスト（教科書）】

受講者の関心に即して決めるつもりです。さしあたり、下記の文献を素材とする予定です。テキストはこちらでコピーを準備します。
Ulf Brunnbauer(ed.) Transnational Societies, Transnational Politics. Migration in the (Post-)Yugoslav Region, 19th-20th Century. Munchen, 2009.

【参考書】

授業において指示します。さしあたり、以下のものを挙げます。

ノーマン・M・ナイマーク『民族浄化のヨーロッパ史』刀水書房、2014年
山本明代、バブ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』刀水書房、2017年

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業における発表、ならびに議論への参加）（50 %）、レポート課題（50 %）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

今回はありません。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉バルカン近現代史、東欧地域研究
ブルガリア史、南スラヴ地域を中心に、バルカン近現代史、東欧地域研究を専門としております。現在は授業のテーマでもある南東ヨーロッパ地域の近現代の人の移動を研究しています。また、東欧地域の史学史研究にも関心を持っております。

【Outline and objectives】

I will examine the influence that various forms of migrations have exerted on regions and human groups in modern times. Since the 19th century in the process of nation-state building, urbanization and industrialization, and conflicts different forms of migrations have been seen. I will take some cases of migrations to deepen understanding of diversity of migrations.

ARCK500G1 - 217

比較宗教文明論

臼杵 陽

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

イスラム国（IS）は壊滅したものの、宗教・宗派・民族紛争は世界中で続いている。ヨーロッパではシリア内戦からの難民に対する排斥運動が続いている。トランプ米政権は「アメリカ・ファースト」を前面に押し出して今後世界がどんな方向に向かうのか、見えてこない。授業では、日本社会で宗教がどんな意味をもっているのかを出発点として世界の宗教紛争の現状を具体的な問題を取り上げながら検討していく。

【到達目標】

イスラム世界を含む現代の宗教紛争を考える際に重要な点は、欧米社会に特徴的に見られる宗教を個人の信仰として捉えるのではなく、共同体あるいは社会における機能に注目して考えることである。文明として宗教を捉えるということはわれわれが現代社会における宗教現象を理解するうえでも重要な視点である。宗教文明における衝突はその教義のちがいのというよりも、それぞれの宗教文明がそれぞれの歴史的過程を経て、その現在が形成されてきたということでもある。したがって、宗教文明を比較の視点から捉えるということは、現在の状況を歴史的な観点からプロセスとして読み直す作業でもある。したがって、宗教の名の下でのテロなどをたんに野蛮で時代錯誤的としてみるのではなく、現代における歴史的過程の帰結という観点からも考え直してみるということである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

出席者数によるが、テキストを決めて演習の形式で進めていくことを原則としたい。必要に応じて、DVDなどの映像資料などを用いながら、「宗教」に関していったい何が問題なのかを含めて考えていくことにしたい。まずは「多神教」といわれる日本社会にとって「宗教」とは何かを考えていき、参加者の関心によってイスラムやユダヤ教などの「一神教」の世界へと話を移していきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業で何を学んでいくのか。
第2回	なぜ日本人は無宗教なのか？①日本人の宗教観	近現代に注目して日本人の宗教観がいかなるものなのかについて考える。
第3回	なぜ日本人は無宗教なのか？②明治期から太平洋戦争まで	明治期から太平洋戦争までの日本人にとっての「宗教」とは何かを考える。
第4回	なぜ日本人は無宗教なのか？③戦後日本	戦後日本の日本人にとっての「宗教」の変容について考える。
第5回	なぜ日本人は無宗教なのか？④9・11事件後	9・11事件後の日本人のイスラム観を考える。
第6回	日本と中東イスラム世界の関係①明治・大正期	明治・大正期の日本・イスラム関係史を考える。
第7回	日本と中東イスラム世界の関係②戦前昭和期	戦前昭和期の日本・イスラム関係史を考える。
第8回	日本と中東イスラム世界の関係③大川周明の初期イスラム研究	国家主義者の大川周明の青年期のイスラム神秘主義研究について考える。
第9回	日本と中東イスラム世界の関係④大川周明晩年のコーラン研究	国家主義者の大川周明の晩年のコーランの翻訳、その研究について考える。
第10回	日本人のユダヤ人観①戦前期	戦前日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第11回	日本人のユダヤ人観②戦後期	戦後期日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第12回	日本人のユダヤ人観③欧米との相違	キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？
第13回	日本人のユダヤ人観④イスラム世界	同じ一神教のイスラム世界のユダヤ人観はキリスト教世界とどのように違うのか？
第14回	まとめ	総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

中東イスラム世界、とりわけイスラム主義あるいはテロはいつ起こるかわからない。したがって、毎日、新聞、テレビ、インターネットでニュースをチェックする習慣をつけてほしい。また、日々起こる事件の表層だけではなく、その底流に流れる事態の本質をきちんと見極める眼力を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】

阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996年。
島蘭進『国家神道と日本人』岩波新書、2010年。

白杵陽『イスラームはなぜ敵とされたのか』青土社、2009 年。
白杵陽『大川周明ーイスラームと天皇のはざままで』2010 年。

【参考書】

井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫、1991 年。
井筒俊彦『コーランを読む』岩波現代文庫、2013 年。
大川周明『回教概論』ちくま学芸文庫、2008 年。
大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、2016 年。

【成績評価の方法と基準】

授業内における報告および質疑応答など積極的な姿勢をもって参加 しているか
によって評価する（40％）。期末にはレポートを提出してもらう（60％）。

【学生の意見等からの気づき】

院生諸君との授業内でのコミュニケーションによって授業のあり方 を検討す
る機会をもつことにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中東地域研究、宗教・エスニック問題
＜研究テーマ＞パレスチナ／イスラエル紛争、日本の対中東関係、とりわけ
聖地問題
＜主要研究業績＞『見えざるユダヤ人』（平凡社）『原理主義』（岩波 書店）、『大
川周明』（青土社）『イスラエル』（岩波新書）、『イスラ ムはなぜ敵とされた
か』（青土社）『アラブ革命の衝撃』（青土社）『世 界史の中のパレスチナ問題』（講談社現代新書）など。

FRI500G1 - 301

多文化情報空間論 I A

森村 修

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の目的は、現代アートの哲学のテキストを精読することによって、
「アートとは何か」「芸術作品とは何か」について考察することである。

2019 年度は、「現象学（Phänomenologie）」影響を受けながら、独自の
芸術哲学を展開した現代フランスの哲学者ジャン＝フランソワ・リオタール
（Jean-François Lyotard,1924-1998）の名著『言説、形象:ディスクール、フィ
ギュール（Discours, Figure）』（1971）を精読する。

リオタールは当初、モーリス・メルロ＝ポンティの現象学の影響下におい
て、マルクス哲学とフロイト精神分析から刺激を受けていた。そこから彼は、
独自のアートの哲学を目指すことになる。その成果が、『ディスクール、フィ
ギュール』というテキストである。

【到達目標】

- ・リオタールの芸術哲学について、説明することができる。
- ・アートにおける言説と形象との関係性について、理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力
を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習
成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」
と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

基本的に「演習」形式で行う。毎回、担当者を決め、レジュメを作成しても
らう。レジュメには、①担当箇所の翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題
点を記載する。また、特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を
行う。その後、それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点に
ついて議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・教員による授業の説明とテキストに 関する導入 ・テキスト読解の注意点の指示
2	ジャン＝フランソワ・リ オタールとは誰か？	・リオタールのプロフィール
3	リオタールの哲学①	・『現象学』（1954）
4	リオタールの哲学②	・『マルクスとフロイトからの漂流』 （1973）
5	リオタールの哲学③	・『リビドー経済』（1974）
6	リオタールの哲学④	・『デュシャン「野」の変形』（1977）
7	リオタールの哲学⑤	・『ポストモダンの条件』（1979）
8	リオタールの哲学⑥	・『文の抗争』（1983）た
9	リオタールの哲学⑦	・『絵画による経験の殺戮』（1984）
10	リオタールの哲学⑧	・『非人間的なもの』（1988）
11	リオタールの哲学⑨	・『判断する能力』（1989）
12	リオタールの哲学⑩	・『崇高の分析論講義』（1991）
13	リオタールの芸術哲学	・『ディスクール、フィギュール』 （1971）
14	まとめ	リオタールの哲学におけるアートの位 置づけ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出する
こと。
- ・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を3つ以上考え、簡単な質
問表を作ってくる（発表当日でよい）
- ・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を1つは考え、当日の議論に参
加する準備をすること。

【テキスト（教科書）】

Jean-François LYOTARD, *Discours, Figure*, KLINCKSIECK, 1971.
ジャン＝フランソワ・リオタール『言説、形象』法政大学出版局、2011 年

【参考書】

Bill Readings, *Introducing Leotard, Art and Politics*, Routledge, 1991
※ 他の参考文献については、追って指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・個別報告発表（50％）（回数および内容による評価）
- ・特定質問担当（30％）（質問内容による評価）
- ・討論参加（20％）（内容による評価）
- ※ 以上に基づいて、総合的に評価する。
- ※ なお、無断欠席は認めない。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【その他の重要事項】

最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解する」ことにならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。

また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。

演習とは **practice** (=実践) を意味しているのであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでもらいたい。

【受講上の注意】

本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものと心得てもらいたい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などとは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 現代哲学（現象学・構造主義以後のフランス哲学）・現代倫理学（ケアの倫理学・応用倫理学）

＜研究テーマ＞ 生命体・地球を含む「生の倫理学」（例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや PTSD に苦しむ人々を「生・生活・人生・生命 (life)」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する）

＜主要研究業績＞

1. 【共著】森村修「『社会政治的トラウマ』の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019年【臨床哲学・生の倫理学】
2. 【共著】森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子／法政大学国際文化学部編『境界』を生きた思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年【現代倫理学】
3. 【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題—テロと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013年【現代哲学】
4. 【論文】森村修「市川白弦の「空-無政府-共同体論（Ś ūnya-Anarchist-Communism）」——小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化 20』、2019年【日本哲学】
5. 【論文】森村修「技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1) —ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 19』論文編、2018年【現代ドイツ哲学・応用倫理学】
6. 【論文】森村修「パウル・ツェランという問題 (1) —ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、2017年【現代ドイツ・フランス哲学】
7. 【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題——比較思想から問文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第 42 号、2016 年【日本哲学・Intercultural Philosophy】
8. 【論文】森村修「センの「道徳哲学」(1) ——パトナム「事実／価値二分法の崩壊」論を手がかりに (1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 17』論文編、2016 年【現代倫理学】
9. 【論文】森村修「『性的差異』のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第 41 号、2015 年【日本哲学・ケアの倫理学】
10. 【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー (1) ——デリダの〈精神分析の哲学〉(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 16』論文編、2015 年【現代哲学】

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to examine "What is art and what is art work" by carefully reading the text of the philosophy of contemporary art.

In 2019, we will read carefully the text of the contemporary French philosopher Jean-François Lyotard (1924-1998): *Discourse, Figure* (1971). He was initially influenced by phenomenology of Maurice Merleau-Ponty, and then he was inspired by Marxian philosophy and Freud's psychoanalysis. From that point he constructed his own philosophy of art.

FRI500G1 - 302

多文化情報空間論 I B

森村 修

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の目的は、現代アートの哲学のテキストを精読することによって、「アートとは何か」「芸術作品とは何か」について考察することである。

2019 年度は、「現象学（Phänomenologie）」影響を受けながら、独自の芸術哲学を展開した現代フランスの哲学者ジャン＝フランソワ・リオタール（Jean-François Lyotard, 1924-1998）の名著『言説、形象：ディスクール、フィギュール（Discours, Figure）』（1971）を精読する。

リオタールは当初、モーリス・メルロ＝ポンティの現象学の影響下において、マルクス哲学とフロイト精神分析から刺激を受けていた。そこから彼は、独自のアートの哲学を目指すことになる。その成果が、『ディスクール、フィギュール』というテキストである。

【到達目標】

- ・リオタールの芸術哲学について、説明することができる。
- ・アートにおける言説と形象との関係性について、理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたなどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」の達成のために特に重要であり、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

基本的に「演習」形式で行う。毎回、担当者を決め、レジュメを作成してもらう。レジュメには、①担当箇所の翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題点を記載する。また、特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を行う。その後、それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	・教員による授業の説明とテキストに関する導入 ・テキスト読解の注意点の指示 ・形象的なものの決意
2	『ディスクール、フィギュール』読解 (1)	
3	『ディスクール、フィギュール』読解 (2)	・意義と指示 ・弁証法、人差し指、形式
4	『ディスクール、フィギュール』読解 (3)	・逆過程と超反省
5	『ディスクール、フィギュール』読解 (4)	・言語記号？
6	『ディスクール、フィギュール』読解 (5)	・体系における厚みの効果
7	『ディスクール、フィギュール』読解 (6)	・言説の縁にある厚み
8	『ディスクール、フィギュール』読解 (7)	・〈否〉と対象の定立
9	『ディスクール、フィギュール』読解 (8)	・対立と差異
10	『ディスクール、フィギュール』読解 (9)	・欲望の「歴史」の一断章をめぐる ヴェドゥータ
11	『ディスクール、フィギュール』読解 (10)	・他なる空間 ・線と文字
12	『ディスクール、フィギュール』読解 (11)	・「夢作業は思考しない」 ・欲望と形象的なものの共謀
13	『ディスクール、フィギュール』読解 (12)	・言説における欲望 ・フィスクール、ディギュール、幻想 のユートピア
14	まとめ	・回帰、自己-説明、二重の逆転 ・まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出すること。
- ・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を3つ以上考え、簡単な質問表を作ってくる（発表当日でよい）
- ・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を1つは考え、当日の議論に参加する準備をすること。

【テキスト（教科書）】

Jean-François LYOTARD, *Discours, Figure*, KLINCKSIECK, 1971.
ジャン＝フランソワ・リオタール『言説、形象』法政大学出版局、2011 年

【参考書】

Bill Readings, *Introducing Lyotard, Art and Politics*, Routledge, 1991

※ 他の参考文献については、追って指示する。

【成績評価の方法と基準】

・個別報告発表（50％）（回数および内容による評価）
・特定質問担当（30％）（質問内容による評価）
・討論参加（20％）（内容による評価）
※ 以上に基づいて、総合的に評価する。
※ なお、無断欠席は認めない。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【その他の重要事項】

最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解する」ことにならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。

また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。

演習とは **practice**（＝実践）を意味しているのであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでもらいたい。

【受講上の注意】

本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものと心得てもらいたい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などとは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代哲学（現象学・構造主義以後のフランス哲学）・現代倫理学（ケアの倫理学・応用倫理学）

<研究テーマ> 生命体・地球を含む「生の倫理学」（例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや **PTSD** に苦しむ人たちを「生・生活・人生・生命(life)」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する）

<主要研究業績>

- 【共著】森村修「『社会政治的トラウマ』の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、**2019年**【臨床哲学・生の倫理学】
- 【共著】森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子／法政大学国際文化学部編『〈境界〉を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、**2016年**【現代倫理学】
- 【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題—テロルと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道: 共生と連帯を求めて』所収、彰流社、**2013年**【現代哲学】
- 【論文】森村修「市川白弦の「空-無政府-共同体論（Ś ūnya-Anarchist-Communism）」——小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化 20』、**2019年**【日本哲学】
- 【論文】森村修「技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1) —ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 19』論文編、**2018年**【現代ドイツ哲学・応用倫理学】
- 【論文】森村修「パウル・ツェランという問題 (1) —ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、**2017年**【現代ドイツ・フランス哲学】
- 【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題——比較思想から問文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第 42 号、**2016年**【日本哲学・Intercultural Philosophy】
- 【論文】森村修「センの「道徳哲学」(1) ——パトナム「事実／価値二分法の崩壊」論を手がかりに (1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 17』論文編、**2016年**【現代倫理学】
- 【論文】森村修「『性的差異』のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第 41 号、**2015年**【日本哲学・ケアの倫理学】
- 【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー (1) ——デリダの「精神分析の哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 16』論文編、**2015年**【現代哲学】

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to examine "What is art and what is art work" by carefully reading the text of the philosophy of contemporary art.

In 2019, we will read carefully the text of the contemporary French philosopher Jean-Francois Leotard (1924-1998): *Discourse, Figure* (1971). He was initially influenced by phenomenology of Maurice Merleau-Ponty, and then he was inspired by Marxian philosophy and Freud's psychoanalysis. From that point he constructed his own philosophy of art.

FRI500G1 - 305

多文化情報メディア論ⅠA

大嶋 良明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的发展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上の英語言説に着目し、その分析手法やメディアデータとしての特徴や書物との違いについて学ぶ。

【到達目標】

この科目では現代英語のテキストを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会を英文テキストとしての諸特性においてとらえる。英米文化の理解と異文化理解の観点から、インターネット上の言説や文化表象に関連するメディアに着目し、その主要な分析手法やモデル化について説明できるようになる。また実際のデータに適用して分析することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・複数レポーター制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
- ・各自が学習内容を相互閲覧可能な形で Web に記録する。
- ・日本語のみならず各国語文化圏の Web テキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
- ・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期		
回	テーマ	内容
1	イントロダクション: 社会と機械学習	Web から海外社会を観察することと分析の課題を学ぶ。
2	即時性の検出	時系列のテキストからキーワードの出現傾向を検出する方法を学ぶ。
3	評判分類	評判分類とは何か、ロジスティック回帰などの手法を学ぶ。
4	意味表現の学習	意味表現とは何かを理解し、そのモデル化と可視化の手法について学ぶ。
5	表現の連鎖	リンクに基づくテキストデータの分析手法を学ぶ。
6	関連性の評価	テキストから関連性の高い文書を見つける手法を学ぶ。
7	話題性の抽出	トピックモデルと言論空間の分析法を学ぶ
8	感情分析	感情分析とは何かを理解し文章から意見の抽出方法を学ぶ。
9	推薦の仕組み	予測とレコメンド手法、バスケット分析の手法を学ぶ。
10	ジャンルの抽出	テキストのジャンル分類を学ぶ。
11	クラス分類	テキストのクラス分類の方法を学ぶ。
12	特徴抽出	大規模データからの特徴抽出の手法を学ぶ
13	特徴量の圧縮	大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ
14	次元削減	第 14 回：まとめ－総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。

予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定しない。必要な資料は授業内で配布する。

【参考書】

全体を通じての参考書は特に指定しない。

必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：

【多言語環境】三上喜貴ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会（2014）、ISBN: 978-4-7664-2178-1

【英米言語文化】Swiss, T., “Unspun,” NYU Press(2001), ISBN: 978-0814797594

【ネット社会の文化的特性】川上量生（監修）、「ネットが生んだ文化」、角川学術出版（2014）、ISBN: 978-4-04-653884-0

【言語分析の手法】

(1) ボレガラ、岡崎、前原、「ウェブデータの機械学習」、講談社（2016）、ISBN:978-4-06-152918-2

(2) Richart, W. and Coelho, L.P.,(著)、齋藤康毅（訳）、「実践 機械学習システム」、オライリー・ジャパン（2014）、ISBN:978-4-87311-698-3

【成績評価の方法と基準】

輪講 35%

レポート（Web を含む）25%

平常点 25%

課題 15%

を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2018 年度よりテキストマイニングに取り組んでいる。履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるよう常に心がける。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノート PC、プロジェクト、インターネット接続環境を使用する。また言語 Python を用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集する Wiki やポートフォリオツール等の CMS を個々の研究科科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード： テキストマイニング、Web、機械学習、データサイエンス、ビッグデータ、インターネット、オンラインデータ

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【Outline and objectives】

This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It also covers well-known research methodology and basic analysis techniques for online text data as well as various types of media data on the Internet.

FRI500G1 - 306

多文化情報メディア論 I B

大嶋 良明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この科目では現代社会をメディアとしての特性から分析する。スミソニアン学術協会が中心となって編集する **Artefacts** シリーズより音楽文化をテーマとしてとりあげ、アメリカ、イギリスとヨーロッパでの電気楽器、音楽制作との関連を学ぶなかから英米現代文化を理解する。原書購読にとどまらずフィールド録音、映画音楽、放送音源など様々なメディア媒体を活用して、演奏の記録や音楽史上での関連事項についても調べ理解を深める。

【到達目標】

近現代の英米社会における口承音楽、楽器演奏、実験音楽、ポピュラー音楽の制作や分析に関心を持ち、それらの欧米での研究の最新動向が身につく。またミュージコロジーのさまざまな研究領域について認識できる。ここで取り扱うそれらの楽器や音楽手法に触発された現代の芸術家とその活動についても関連を見いだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

- ・複数レポート制による輪講（英語文献の講読を中心とする）
- ・各自が学習内容を相互閲覧可能なオンライン記録とすることを目指す。
- ・視野形成と問題意識の深化を目的として、リスナーとして演奏者、制作者としての音楽体験に関連する話題提供を歓迎する。
- ・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	本講義のねらいと取り扱う論考の全体視野を身に着ける。
第 2 回	フィールド録音とブルース音楽	1940 年代のミシシッピ州刑務所 Parchman Farm でのフィールド録音と記録から口承音楽としての囚人歌からデルタ・ブルースの関連を学ぶ。
第 3 回	欧米教会音楽における電子オルガン	1930 年代のアメリカと 1960 年代ノルウェーでのハモンドオルガンの受容普及と教会文化との軌跡の歴史を学び、教会音楽での電子オルガンの果たした役割とその時代的な関係を検討する。
第 4 回	アメリカ音楽文化におけるハモンドオルガン	Mark Vail の “The Hammond Organ: Beauty in the B” を参考に 1950 年代以降を中心にポピュラー音楽と教会音楽の視点からアメリカ文化を考察する。
第 5 回	Ethel Smith とオルガン音楽	1940 年代から 1970 年代にかけての Ethel Smith のレコード音源、編曲楽譜、映画、新聞記事などを手掛かりにアメリカのポピュラー音楽文化に足跡を残した演奏家の芸能活動と音楽出版について学ぶ。
第 6 回	Moog シンセサイザー	Trevor Pinch による “Analog Days: The Invention and Impact of the Moog Synthesizer” はかの資料を参考に電子楽器としての Moog の革新性と 1970 年代のポピュラー音楽に与えた影響を検討し音楽史上における文化的価値について考察する。
第 7 回	ドラムマシンとサンプラー	初期のドラムマシンに始まり Mellotron や Fairlight などのサンプラー楽器が 1970 年代以降の英米のポピュラー音楽に果たした役割とその影響について検討する。
第 8 回	前衛音楽とアメリカ西海岸のカウンターカルチャー	Pauline Oliveros ら San Francisco Tape Music Center のメンバーが現代作家との協力関係の中で活動し 1960 年代アメリカの対抗文化に及ぼした影響について学ぶ。

発行日：2019/5/1

第 9 回	イギリス放送文化における電子音楽の隠された次元	Daphne Oram が取り組んだ Oramics Machine、BBC Radiophonic Workshop の Delia Derbyshire、EMS の David Cockerell らの先駆的業績を取り上げ電子音楽、放送文化、劇伴音楽における英国文化の影響について検討する。
第 10 回	電子楽器と映画音楽	テルミン、VCS3、Moog などの 20 世紀の電子楽器が映画音楽やレコード芸術に果たした役割を検討する。
第 11 回	前衛「楽器」としてのフィルターとダブ・ミュージックの誕生	1970 年代のシュトックハウゼンと King Tubby によるポピュラー音楽のダブというかけ離れたジャンルでの音楽制作の共通項としてフィルター操作の役割と音楽表現上の位置づけを検討する。
第 12 回	CCRMA	学際的研究としての大学での電子音楽研究に焦点を当てて、1970 年代に開設され現在も続くスタンフォード大学の CCRMA が及ぼした影響とその功績を、デジタルシンセサイザーの開発研究と電子音楽の制作環境を中心に検討する。また同時期に開設されいづれも今日まで活発な研究活動を展開するフランスの IRCAM との対比において考察する。
第 13 回	演奏における artefacts	音楽演奏における artefacts(ここでは付加的人工物) による楽器の構造的・機能的拡大や楽器概念の拡大について検討する。
第 14 回	まとめ	総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。
予習復習として、毎回の授業で担当教員が指定するテキスト（英語原著論文を含む）を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。

【テキスト（教科書）】

Frøde Weium, Tim Boon (Ed), "Material Culture and Electronic Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)", Smithsonian Institution Scholarly Press (2013), ISBN 978-1-935623-10-6

【参考書】

【アメリカ文化におけるポピュラー音楽】大和田俊之、「アメリカ音楽史 ミンストレル・ショー、ブルースからヒップホップまで」、講談社 (2011)、ISBN: 978-4062584975

【英米文化における教会音楽】越川弘英、「教会音楽ガイド」、日本基督教団出版局 (2010)、ISBN: 978-4818407497

【ポピュラー音楽、教会音楽と電子楽器】Vail M., "The Hammond Organ: Beauty in the B," Backbeat Books (2002), ISBN: 978-0879307059

Pinch T., "Analog Days: The Invention and Impact of the Moog Synthesizer," Harvard University Press (2004), ISBN: 978-0674016170
Vail M., "Vintage Synthesizers," Backbeat Books (2000), ISBN: 978-0879306038

【フィールド録音、ブルース音楽、黒人文化】Lomax A., Jackson B., "Parchman Farm: Photographs and Field Recordings 1947-1959," Dust-to-Digital (2015), ISBN: 978-0981734293

【アメリカの電子音楽研究】Nelson A., "The Sound of Innovation: Stanford and the Computer Music Revolution," The MIT Press (2015), ISBN: 978-0262328807

【60 年代カウンターカルチャーと前衛音楽】Bernstein, D., "The San Francisco Tape Music Center: 1960s Counterculture and the Avant-Garde," University of California Press (2008), ISBN: 978-0520256170

【Ethel Smith と教会音楽、ポピュラー音楽】大嶋良明、「Ethel Smith をめぐって」、『異文化』, 第 18 号、pp231-240, 法政大学国際文化学部 (2017), ISSN: 13493256

Smith E., "Ethel Smith's Favorite Hymns for Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp.(1948).

Smith E., "Ethel Smith's Easter Music for the Spinnet Model Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp.(1954).

Smith E., "Ethel Smith's Simplified Transcriptions of Spirituals Registered for Pipe and Hammond Organ," Ethel Smith Music Corp.(1949).

Ethel Smith Music Corp. (Ed.), "20 Stars, 40 Hits for Hammond Organ (Pre-set and Spinnet Models)," Ethel Smith Music Corp. (1957).

Smith E. (Arr.), "The Golden Organ Instructor," Charles Hansen Educational Sheet Music and Books (c1973)

その他必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

輪講 35%

レポート・ディスカッション (Web を含む) 25%

平常点 25%

課題 15%

を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2017 年度以降の新規科目であるが、文献購読とレポート制による学習負荷については工夫に努める。2018 年度は購読文献に現代的視点を取り入れ、インターネット上のメディア情報についても取り扱った。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノート PC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。国際文化研究科では、学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集する Wiki やポートフォリオツール等の CMS を個々の研究科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用されたい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード：ミュージコロジー、現代音楽、コンピュータ音楽、電子楽器、ポピュラー音楽、アーティファクト (知的人工物)、音響メディア、メディアアート

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【Outline and objectives】

This course deals with an cross-disciplinary area of Musicology, Computer Music and History of various musical instruments and studio production gears. Course materials will be taken from "Material Culture and Electronic

Sound (Artefacts: Studies in the History of Science and Technology)" by Smithsonian Institution Scholarly Press.

多文化情報メディア論Ⅱ

重定 如彦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスなどのゲームを題材とする AI からはじめ、近年注目を浴びている画像を認識するディープラーニングを用いた AI などを題材とした実習を行いながらその仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解できるようにする。

また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。

【到達目標】

人工知能の基礎を学ぶ。

人工知能が社会に与える影響について自分なりの考察を行えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

人工知能について、古典的なチェスのようなゲームにおける手法から始め、最近注目を浴びてきているディープラーニングを使った画像認識に至るまで、具体的にその仕組みについて実習を行いながら学習していく。

授業では、あらかじめ与えたテーマについて各自が発表し、その内容についての議論なども行う。

学生の理解度に応じて、実際に動作する、簡単な人工知能のプログラミングの実習などを行うことも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	人工知能の定義と歴史	授業の導入及び、人工知能の定義や歴史について学ぶ
2 回	ゲームの人工知能	○ × ゲームやチェスなど、ゲームにおける人工知能の考え方について学ぶ
3 回	ゲーム木と探索	ゲームを題材とした人工知能における、古典的な手法であるゲーム木とその探索について学ぶ
4 回	α β 法と、枝刈り	ゲーム木の探索を効率的に行うための手法の一つである α β 法と、ゲーム木の枝刈りについて学ぶ
5 回	様々な探索手法	ゲーム木の様々な探索手法について学ぶ
6 回	評価関数	状況を数値化するための手法（評価関数）について学ぶ
7 回	機械学習とディープラーニング	機械学習の基礎とその種類について学ぶ
8 回	ニューラルネットワーク	ディープラーニングの基礎となるニューラルネットワークについて学ぶ
9 回	画像の分類	機械学習を用いた画像認識について学ぶ
10 回	ディープラーニングによる学習	人工知能がディープラーニングにおいて、どのように学習していくかについて学ぶ
11 回	機械学習における様々な手法	機械学習で用いられる様々な手法について学ぶ
12 回	人工知能の問題点	人工知能が抱える問題点や、限界などについて学ぶ
13 回	社会に与える影響	人工知能が社会に与える影響について議論する
14 回	まとめ	授業で学んだことのまとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前半は教科書を指定しないが、授業で学んだことをしっかりと復習し、授業内で提示する次の授業のテーマについて予習する。

後半は教科書を読んで予習を行い、授業で学んだことをしっかりと復習する。

【テキスト（教科書）】

「ゼロから作る Deep Learning — Python で学ぶディープラーニングの理論と実装」 斎藤 康毅 オライリー・ジャパン

その他、必要に応じて授業内で提示する。

【参考書】

なし

【成績評価の方法と基準】

「配分」

平常点 25 %、授業内での発表や議論 50 %、レポート 25 %

「評価基準」

発表及びレポートは、読解の正確さ、発表資料またはレポートの適切さ等によって評価する

【学生の意見等からの気づき】

昨年度、一昨年度は受講生がいなかったため、学生からの意見等からの気づきはなかった。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門分野＞情報科学

＜研究テーマ＞ユビキタスコンピューティング、分散 OS、ユーザインタフェース
＜主要研究業績＞

「デジタルミュージアムのためのキオスク型 WWW ブラウザ」、電子情報通信学会論文誌, vol.J85-D1, No.3, 2002 年 3 月

「分散ハイパーメディア OS Net-BTRON におけるハイパーメディアサーバ管理機構」、情報処理学会論文誌, 2001 年 6 月

A Distributed Hypermedia Operating System: Net-BTRON, In Proceedings of the 2000 International Conference on Communication Technology, IFIP ICCT2000/WCC2000, vol.2 (Aug.2000)

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura, "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure," 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), pp. 303 - 310, July 19 - 23, 2010.

【Outline and objectives】

The objectives of this class are to learn about basics of artificial intelligence, and discuss about influence of artificial intelligence on our society.

Thesis Writing A

ジェイソン・ポール・スミス

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

The course will review the fundamentals of good English writing, and help students build a solid foundation in the English writing mechanics and style used in academic papers.

【到達目標】

The Goal of this course is to provide participants with an active approach to increase their English writing skills, and ultimately writing an academic research paper. The class will focus on basic research and academic writing methods. Mechanics of writing such as summarizing, paraphrasing, narrowing topics; and developing thesis statements and topic sentences, as well making accurate citations will be learned. The Modern Language Association (MLA) writing format will be used.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

The course will emphasize writing, coherence, and common stylistic errors in academic writing. Students will develop a bibliography and build support for their research papers. This class will not be filled by endless lectures. Instead, time will be occupied by writing practice and peer editing. Thesis Writing A emphasizes the usage of a textbook while Thesis Writing B will be taught with teacher handouts and much in-class writing. The repetition between semesters is intentional; practice & more practice. I reserve the right to make adjustments to this syllabus to meet the collective needs of the class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Unit 1 Going to Write One Paragraph	Class introduction & going over syllabus, short lecture on academic vs. non-academic writing. Topic sentences, supporting sentences and concluding sentences.
第 2 回	Unit 2 Trying To Be Polite	Using appropriate style in writing, what is plagiarism and how to avoid it.
第 3 回	Unit 3 What Do You Think?	Generating ideas, analyzing an opinion paragraph, writing the first draft.
第 4 回	Unit 4 This May Work	Proposing a solution, brainstorming, peer review.
第 5 回	Unit 5 How Could It Happen?	Writing cause and effect paragraph.
第 6 回	Unit 6 What Is an Essay?	Essay structure, effective thesis statements, body and conclusions.
第 7 回	Unit 7 Writing Your Own Outline	More on thesis statements, main ideas and writing your own idea.
第 8 回	Unit 8 Let Me Tell You About a Beautiful Place	Descriptive Essays 1: How to write vibrant and descriptive essays, painting a picture with words
第 9 回	Unit 9 Let Me Tell You About an Amazing Time	Descriptive Essays 2
第 10 回	Unit 10 That's a Good Point	Persuasive Essays 1: Health issues, planning your strategy.
第 11 回	Unit 11 Developing Logical Points of Support	Persuasive Essays 2: Health issues; Build Your Essay, putting it all together, review.
第 12 回	Unit 12 How Are They Different?	Identifying similarities and differences.
第 13 回	Unit 13 How are They Different?	Comparison Essays 1 :Education; 5 basic stages in comparison essays.
第 14 回	Unit 14 Let's Sort It Out	Writing informative, interesting and easy-to-follow classification essays (Classification Essays 1 Events and Festivals).

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will have to do all textbook activities and finish one short unit (5-8 pages) each week as instructed.

【テキスト（教科書）】

From Paragraph to Essay (NAN'UN-DO) ISBN 978-4-523-17727-2 C0082

【参考書】

Handouts given by the instructor

【成績評価の方法と基準】

Homework and assigned work must be handed in on the date announced by the instructor. Assignments submitted late without an acceptable excuse and formal verification for the absence will result in a loss of ten points per day for the assignment. Plagiarism: knowingly representing the words of another as one's own in any academic activity will automatically result in a failing grade on the assignment.

50% Participation, Discussions and Homework

50% Textbook Exercises and Writing Assignments

【学生の意見等からの気づき】

The class is now offered for one full academic year as explained above.

【学生が準備すべき機器他】

Thesis Writing A does not require any additional equipment.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> American Studies

<研究テーマ> Social Studies

<主要研究業績> The Uprising of the Molly Maguires in Eastern Pennsylvania, Washington State University Press, 1991

Lost Art of the Cornet Society, Sidgwick & Jackson Ltd; June, 2005

Thesis Writing B

ジェイソン・ポール・スミス

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

The course will review the fundamentals of good English writing, and help students build a solid foundation in the English writing mechanics and style used in academic papers.

【到達目標】

The Goal of this course is to provide participants with an active approach to increase their English writing skills, and ultimately writing an academic research paper. The class will focus on basic research and academic writing methods. Mechanics of writing such as summarizing, paraphrasing, narrowing topics; and developing thesis statements and topic sentences, as well making accurate citations will be learned. The Modern Language Association (MLA) writing format will be used.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

The course will emphasize writing, coherence, and common stylistic errors in academic writing. Students will develop a bibliography and build support for their research papers. This class will not be filled by endless lectures. Instead, time will be occupied by writing practice and peer editing. Thesis Writing A emphasizes the usage of a textbook while Thesis Writing B will be taught with teacher handouts and much in-class writing. The repetition between semesters is intentional; practice & more practice. I reserve the right to make adjustments to this syllabus to meet the collective needs of the class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Tentative Course Schedule	Go over syllabus.
第 2 回	Identifying and creating thesis statements	Review: identifying and creating thesis statements. Student practice of this concept Homework: One page paper on why you are pursuing a Master's Degree (due next week). Handout list of academic topics for research paper
第 3 回	What is the difference between a thesis statement and a topic sentence?	Peer editing on the above essay, When and Where to use Personal Pronouns homework (due next week) your topic for research and why you chose it.
第 4 回	In class writing	Modern Language Association (MLA formatting), work on term paper, quotations Laptop computers required from this class and all remaining classes
第 5 回	Beginnings/Endings: Titles, Introductions, Quotations, Conclusions	More on MLA formatting. Short lecture with "avoiding ambiguity" handout. Independent work on essays and Q&A.
第 6 回	How to research	Supporting information for your essay, coherent paragraphs with transitions, citing sources.
第 7 回	Writing bibliographies	One half hour lecture on writing bibliographies followed by trip to the library to select supporting information with citations.
第 8 回	Process of Revising	Short lecture on rewriting followed by application and peer editing. Beginnings and ends (titles, intros and conclusions).

第 9 回	Review and beyond	Developing thesis statements, topic sentences, and supporting ideas & independent work on essays.
第 10 回	Feedback	Q & A ... First hard copy draft of five page essay due. In class pair-work and review.
第 11 回	Workshop	First drafts returned with feedback. Q & A as well as pair-work and independent writing of 2nd draft.
第 12 回	Lecture & Workshop	Short lecture on solidifying writing techniques followed by independent writing.
第 13 回	Wrapping things up	Hard copy of 2nd draft of five page essay due. Stressing clarity & thought provoking writing. In class writing.
第 14 回	Review	Lecture of main writing mechanics previously taught. In class writing.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will have to read and understand all handouts given in class as well as materials for each class, as instructed.

【テキスト（教科書）】

From Paragraph to Essay (NAN'UN-DO) ISBN 978-4-523-17727-2 C0082

【参考書】

Handouts given by the instructor

【成績評価の方法と基準】

Homework and assigned work must be handed in on the date announced by the instructor. Assignments submitted late without an acceptable excuse and formal verification for the absence will result in a loss of ten points per day for the assignment. Plagiarism: knowingly representing the words of another as one's own in any academic activity will automatically result in a failing grade on the assignment.

50% Participation, Discussions and Homework

50% Textbook Exercises and Writing Assignments

【学生の意見等からの気づき】

The class is offered for one full academic year as explained above.

Although the aim of the instructor is to follow the syllabus, he reserves the right to make adjustments or changes when necessary.

【学生が準備すべき機器他】

Thesis Writing B requires students to have a laptop computer starting the second week of the semester.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> American Studies

<研究テーマ> Social Studies

<主要研究業績> The Uprising of the Molly Maguires in Eastern Pennsylvania, Washington State University Press, 1991

Lost Art of the Cornet Society, Sidgwick & Jackson Ltd; June, 2005

Oral Presentation

マーク・フィールド

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Good communication skills are necessary for anyone wanting to work in an international environment. This course is for students with a strong desire to improve their English language presentation skills. The course will focus on helping students talk about their current research theme in English and acquiring the language skills used in Oral Presentations given in English.

【到達目標】

The goal of the course is to develop students' communications skills and confidence as public speakers. Course content will include listening and vocabulary development, as well as extensive practice in using spoken English as a presentation tool. The main theme of students' presentations will be based on their current research interests.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」と「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP2」の達成のために重要である。また、「DP1」の達成のために望ましい。

【授業の進め方と方法】

The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to actively participate in classroom activities, prepare weekly homework assignments, and review and practice at home for in-class presentations.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	Class Orientation:	Presentations and Speeches: What is the Difference?
2 回	Structure:	The Types of Language Used in an Oral Presentation
3 回	Presentation #1:	Presenting Your Background & Research Interests
4 回	Learning Strategy:	Assessing Your Skills
5 回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part I
6 回	Presentation #2:	Introducing Geographical Locations
7 回	Expanding Discourse:	Exchanging Information
8 回	Reflective Communication:	Planning Your Presentation
9 回	Presentation #3:	Presenting Books and Research Material
10 回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part II
11 回	Expanding Discourse:	Controlling Your Presentation Environment
12 回	Putting It All Together:	Talking About Main Points
13 回	Putting It All Together:	Clearing up Confusing Ideas
14 回	Final Assessment:	Presentation of Your Research Theme

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. Effective presentations depend on sufficient preparation and practice, so students will need to prepare and practice outside of class before giving their in-class presentations.

【テキスト（教科書）】

The instructor will provide some reading materials related to Oral Presentation Skills.

【参考書】

Students will be expected to bring in reading materials related to their current research interests.

【成績評価の方法と基準】

30% On-going Evaluation participation, discussions etc.

20% Homework

50% In-class Presentations

** Class attendance is a course requirement.

Students are allowed no more than three absences in the academic semester.

【学生の意見等からの気づき】

Previous students were happy with this course and currently no data is available to support changing it. However, the instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

We will use some OHC (Over Head Camera) and/or PC (Personal Computer) equipment to Present Visual Aids.

【その他の重要事項】

The Instructor Reserves the Right to change or alter this syllabus as needed.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【Outline and objectives】

This course is for students with a strong desire to improve their English language presentation skills. The course will focus on helping students talk about their current research theme in English and acquiring the language skills used in Oral Presentations given in English.

SOS500G1 - 405

国際協力論

松本 悟

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では国際協力を文化の視点から考える。文化とは「体系的な生きるための工夫」（クラック・ホーン）であり、協力を必要とする背景及び協力そのものが特定集団に内在する文化によって影響を受けると同時に文化に影響を与えている。いくつかのキーワードを手がかりに文献を丁寧に読み解きながら、文化という切り口から国際協力の歴史と現状を理解する。

【到達目標】

- (1) 授業で取り上げる概念や術語について理解できる。
- (2) 国際協力を国際文化の視点から論じることができる。
- (3) 当該分野の文献を正しく理解し、分析的な発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

事前に指定した文献（20 頁前後）を熟読した上で議論する。毎回担当者が、文献から論点を提示し、それをもとに議論し発表する。他の受講生は課題文献で重要だと考えた点を授業支援システムを通して事前に提出すること。また、教員が随時補足的な講義を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の説明、受講者の関心の共有に基づき、必要に応じて課題文献を変更する。
第 2 回	国際協力と文化	国際協力とは何か、文化とは何か、国際協力を国際文化の視点で捉えるとはどういうことか、考える。
第 3 回	文化を変容させる国際協力	開発コミュニケーションの歴史をひもとき、戦後の開発協力における文化の捉え方をもとに議論する。
第 4 回	文化に配慮する国際協力	1980 年代以降登場した開発協力における社会・文化的配慮について考える。
第 5 回	伝統ドナーと（再）新興ドナー	OECD-DAC に加盟していない国による国際協力を取り上げ、「国際協力文化」の変容を考える。
第 6 回	新興ドナーの市民社会	OECD-DAC に加盟していない国の国際協力は社会・文化的な配慮がないのかを市民社会の動きに着目して考える。
第 7 回	国際文化交流と国際協力	戦後日本の国際文化交流の変遷から特に民間財団に着目して国際協力について考える。
第 8 回	日本の市民社会の変容と国際協力	国家とは異なるスタンスで活動する NGO に着目して国際協力の多様性を考える。
第 9 回	国際協力に携わる人と文化	国際協力に携わる人たちが異文化の中でどのように適応しながら協力の目的に向き合うのかを考える。
第 10 回	ビジネスと人権	民間企業に求められる社会配慮の視点からビジネスと国際協力の関係について考える。
第 11 回	文化財保護と国際協力	ナショナリズムに繋がりがかねない文化財を他国が保護することの意味について考える。
第 12 回	日本の文化無償援助	日本政府の文化無償に対する評価を読み、文化分野の支援の持つ意義と危うさを考える。
第 13 回	日本国内の難民支援	日本国内の難民申請者や難民認定者（人道保護を含む）について文化の視点から考える。
第 14 回	総合討論	この授業で扱った文献を横断的に分析し、「国際協力と文化」について新たな視点を掘り起こす。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に提示する課題文献は必ず読んでくること。発表担当者はレジュメを用意すること。他の受講生は課題文献で重要だと考えた点を授業支援システムを通して事前に提出すること。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

課題文献は最初の授業で示す

【成績評価の方法と基準】

①文献講読と発表 80%（最低 2 回、文献の正しい理解、論点抽出の妥当性、議論のファシリテート）、②授業での積極性 20%（発言、取りまとめなど）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムを利用できるようにしておくこと

【その他の重要事項】

- ・国際協力に 15 年近く携わった教員が具体的な経験に基づく事例も紹介しながら授業を行う。
- ・履修者の関心によって、授業内容や課題文献を若干変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO

<主要研究業績>

『調査と権力』（単著、東大出版会、2014 年）

『NGO と世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）

『人々の資源論』（共著、明石書店、2008 年 9 月）

『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005 年 9 月）

【Outline and objectives】

This course aims to enable students to understand and analyze international cooperation from the aspects of "culture". It includes the background which requires international cultural cooperation, the impacts of international cooperation on culture and the impacts of culture on international cooperation.

国際人権論

藤岡 美恵子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

○授業の概要

人権は現代世界で常に重要な問題として扱われてきた。その保障は国際的に普遍的な課題として認識されており、何よりも、社会的に周縁化されてきた人々が自らの人間の尊厳を回復するための重要な手立てとして活用してきたのが人権であった。

しかし、国際的な人権保障の思想や制度に対する重大な挑戦が立ちだかっている。ひとつは、20 世紀終盤以降「対テロ戦争」の名のもと、人権を享受できる者とできない者の峻別が出現し、強化されつつあるという現実である。さらに近年の難民・移民の排除の強化、根強い人種主義・人種差別の現実、人権の普遍的享受という原則が決して実現していないことを示している。もうひとつは、近代の国民国家体制とともに生まれた人権思想と制度は、その枠組みの中で排除や搾取の対象となってきた集団（先住民、マイノリティ、移民）の尊厳を守るためには不十分、もしくは根源的な矛盾をはらむという点である。

この二つの現象には植民地主義の継続という共通の問題が関係している。植民地主義が終焉するどころか、新たな形態で継続しているという認識が広く支持されるようになっている現在、近代の人権保障の思想と制度が植民地主義の観点から再考されるようになっている。この課題は、ヘイトスピーチの台頭という重大な挑戦に直面する日本社会にとっても、きわめて重要な課題である。

本授業では、第二次大戦以降の人権の概念と保障体制の発展を踏まえた上で、こうした人権をめぐる危機を植民地主義と人種主義をキーワードに考えていく。

○授業の目的・意義

「人権＝善」という単純な思考を見直し、人権はなぜ必要なのか、どうすればあらゆる人々の尊厳を保障することができるのかを、人権を侵害されてきた／いる人々の立場から考える思考態度を身につけ、人権をめぐる生じている国際的な課題について批判的な理解・思考能力を養う。

【到達目標】

第 2 次大戦後の国際的な人権保障の体制や考え方がどのように進展してきたかを踏まえた上で、20 世紀初頭の国際秩序の変容の中で、人権の保障という課題がどのような矛盾や問題を抱えているのかを、植民地主義、人種主義というキーワードを使って整理し、説明できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」の達成のために特に重要であり、「DP2」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

各回の指定テキストの報告発表と討論で進め、期末に授業の内容に関係したテーマのレポートを作成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション：授業のテーマと授業計画	日本における人権意識の状況を考えてつ、授業のテーマと目的を説明する。
第 2 回	国際人権システムの歴史的起源と発展	国際人権保障システムがどのように発展してきたかその歴史をたどる。
第 3 回	国際人権システムのインパクトと限界	国際人権保障システムが具体的な人権問題の解決にどのようなインパクトをもたらしたのかを振り返る。一方でその限界も理解する。
第 4 回	変容する世界と国際人権	冷戦終結と 9・11 以降、「テロリズム」という記号が動員される中での人権の後退と新たな問題。
第 5 回	人権と「文明化の使命」	「北」による「南」の近代化（現代版「文明化」）の推進力として機能する国際人権。
第 6 回	植民地主義と先住民の自決権	日本によるアイヌ・沖縄への植民地支配の歴史と先住民の自決権。
第 7 回	植民地主義の克服と「多文化共生」論	北朝鮮パッシングを手がかりに、日本の「多文化共生」論と植民地主義の克服という課題の関係を考える。
第 8 回	「多文化共生」におけるマジョリティとマイノリティ	マイノリティの視点から見る「多文化共生」の問題。
第 9 回	国民統合の概念としての多文化主義	国民統合の概念としての多文化主義の問題点を探る。
第 10 回	多文化主義と人権の未来	EU を例に多文化主義を標榜する社会における新たな排除の問題を考える。
第 11 回	植民地支配責任	植民地支配の責任を問う声が台頭する中、責任を問うことの意義を考える。

第 12 回	過去の人権侵害への責任	現在の人権をめぐる課題が過去の重大人権侵害に対する責任と密接に関係していることを踏まえ、その責任をどのように問えるのかを考える。
第 13 回	再考：人権とは何か	人権の保障と国民国家体制の関係を考える。
第 14 回	まとめ／レポート講評	授業を振り返りまとめの討論を行う。レポートの講評も行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の報告担当者は、指定テキストの内容の報告にとどまらず、議論のための論点を提示できるように準備する。担当者以外も、授業中にディスカッションができるように入念に読んでおく。

【テキスト（教科書）】

阿部浩己『国際法の暴力を超えて』岩波書店、2010 年
その他プリントを配布

【参考書】

- ①岩崎稔他『継続する植民地主義—ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005 年
- ②岡和田晃／マーク・ウィンチェスター『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、2015 年
- ③エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラリズム』岩波書店、1996 年
- ④小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001 年
- ⑤塩原良和『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義——オーストラリアン・マルチカルチュラリズムの変容』三元社、2005 年
- ⑥永原陽子編『植民地責任』論—脱植民地化の比較史』青木書店、2009 年
- ⑦西川長夫『〈新〉植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006 年
- ⑧ガッサン・ハージ（保刈実・塩原良和訳）『ホワイト・ネイション——ネオ・ナショナリズム批判』平凡社、2003 年
- ⑨バンセル、N. ほか『植民地共和国フランス』岩波書店、2011 年
- ⑩樋口直人『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会、2014 年
- ⑪ミシェル・ヴィヴィオルカ『レイシズムの変貌：グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化』明石書店、2007 年
- ⑫藤岡美恵子『戦争を止めることが人権を守ること』中野憲志編『終わりのなき戦争に抗う——中東・イスラーム世界の平和を考える 10 章』新評論、2014 年
- ⑬ジョージ・M. フレドリクソン『人種主義の歴史』みすず書房、2009 年
- ⑭前田朗『ヘイト・クライム』三一書房労働組合、2010 年
- ⑮アルベール・メンミ『人種差別』法政大学出版局、1996 年
- ⑯テッサ・モリス＝スズキ『批判的想像力のために』平凡社、2002 年
- ⑰テッサ・モリス＝鈴木『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』みすず書房、2000 年

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点（発表、討論への参加）60 %、期末レポート 40 %
- ・発表については指定テキストの内容の報告だけでなく、討論のための論点の提示を求める。
- ・討論への参加については、内容の理解に加え、討論の進行を助け、他の参加を促すような積極的な疑問の提示、意見表明を評価する。
- ・期末レポートは、授業で取り上げる理論や概念の理解度を中心に評価する。字数：6000 字から 10,000 字、提出日：第 13 回

【学生の意見等からの気づき】

日本における人権問題とできるだけ関連づけて議論できるように授業計画とした

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>国際人権論、NGO 論
- <研究テーマ>先住民・マイノリティの権利と多文化主義、植民地主義と人権・人権 NGO
- <主要研究業績>
- ・「戦争を止めることが人権を守ること」中野憲志編『終わりのなき戦争に抗う——中東・イスラーム世界の平和を考える 10 章』新評論、2014 年
- ・「人道支援における「オール・ジャパン」と NGO の独立」藤岡・越田・中野編『脱「国際協力」——開発と平和構築を超えて』新評論、2011 年
- ・「植民地主義の克服と「多文化共生」論」中野憲志編『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007 年

【Outline and objectives】

The guarantee of human rights, historically an important vehicle for socially marginalized people to restore their human dignity, now faces serious challenges. One is that human beings are now increasingly categorized as those who deserve human rights and those who are not, the distinction re-introduced by the so-called “war on terror.” Intensifying exclusion of refugees/migrants and manifestations of deep-rooted racism are also alarming realities. Another challenge is the ideas and systems of human rights born with the development of the modern nation-state system has been inadequate or inconsistent with the guarantee of dignity of groups excluded or exploited in the same system.

The two phenomena are closely related to continuing colonialism. The modern ideas and systems of human rights are increasingly being reviewed in relation to colonialism. This is also an important issue for Japan that faces serious challenges from rising tide of hate speech and discrimination.

This course will review the development of human rights since WWII and consider these crises of human rights with colonialism and racism as two keywords.

FRI500G1 - 408

多文化情報ネットワーク論B

和泉 順子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術の研究背景とその時代で最先端だったシステム設計を学ぶことで情報ネットワークの仕組みを大まかに掴み、今後のインターネットや他情報科学技術の使われ方について議論します。

【到達目標】

この科目では、コンピュータネットワークの仕組みの概略を理解し、現在利用されているインターネットの利用形態に関連する技術を知ると同時に、今後の通信技術の展望を考えることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」と「DP3」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

この科目の到達目標は、現在深く広く普及しているインターネットを始めとする情報ネットワークについて、その仕組みの概略と開発背景を掴むことである。その上で、情報ネットワーク技術が社会通信基盤として利用されていることを鑑み、実空間情報が仮想空間上にデジタルデータとして流通することの利便性とリスクを検討し、議論する。

全体を通して、教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指し、問題意識の整理と解決のための意見交換をしていく。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第2回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第3回	インターネットの歴史	インターネットの開発の理由や歴史、コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第4回	プロトコルとレイヤ（OSI 参照モデル）	OSI 参照モデル、および現状のインターネットアーキテクチャと主なプロトコルを学ぶ。
第5回	経路制御アルゴリズム	ネットワーク層で使われる主な経路制御アルゴリズムを学ぶ。
第6回	IP アドレスと名前解決	インターネットプロトコル（IP）の役割と名前解決の仕組みを学ぶ。
第7回	無線技術と移動体通信	無線通信技術の種類と変遷を学び、移動体通信技術について学ぶ。
第8回	クラウドコンピューティング	クラウドコンピューティングの仕組みを学び、利益と弊害を議論する。
第9回	インターネットの社会性	インターネットが共通通信基盤として社会的に普及したことによる利益と弊害を議論する。
第10回	日本の通信技術戦略	日本が進めてきた通信技術戦略の一部を紹介し、その効果について議論する。
第11回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものかを学び、議論する。
第12回	ネットワーク技術の国際標準化	情報技術の普及戦略の一角を担う国際標準化について学ぶ。
第13回	知的財産とインターネット	知的財産権の一つである著作権を学び、国境を越えて利用されるインターネット上での振る舞いを考える。
第14回	情報ネットワークの抱える問題、授業のまとめ	情報ネットワークの将来性と問題について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

レポートまたは小テスト（30 %）、平常点（20 %）、最終レポート（50 %）で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞インターネット上の情報流通に関する研究

＜研究テーマ＞主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題

＜主要研究業績＞

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline and objectives】

We will grasp the mechanism of information communication technology roughly and discuss how future information technology is used in real society.

国際文化研究日本語論文演習 A

浅利 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語の論理的文章を読み、書く練習を通じて、日本語を読む能力と書く能力を拡充し、専門分野の修士論文を書くための基礎力を身につける。

【到達目標】

- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章の論旨を正確に読み取ることができる。
- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約できる。
- ・与えられたテーマで 800 ～ 1200 字程度の小論文を書くことができる。
- ・自分の修士論文についてレジュメを作成し、定められた時間で口頭発表できる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて、日本語で自分の感想や意見を述べ、他の意見を良く理解して、議論することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

第1回の授業では、全受講生のスピーチと作文により、日本語レベルを確認します。第2回では、自己紹介と修士論文のテーマについて作文し、日本語の文章力と研究テーマ等を確認します。第3回から第8回は、学術的・専門的な日本語の文章を課題文として配布し、正確に音読できるよう確認した後、指示された字数で要約文を書く練習をします。提出された各人の要約文は、すべて添削して次回の授業で返却します。その後、課題文のテーマについて、全員が感想や意見を出し合い討議します。第9回から第12回は、小論文を書く練習をします。400字から始め、1200字程度の小論文を書くことを目標に練習しつつ、論理展開や段落構成の基礎を学びます。提出された小論文は、すべて添削して次回の授業で返却します。第13回と第14回は、必要に応じて、7月の概要発表会の準備をします。レジュメの書き方を学び、口頭発表の練習をします。学習内容・方法や難易度は、受講する学生の日本語の水準や希望等に合わせて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション 自己紹介スピーチ・作文	授業の目的と方針、学び方の説明 受講者の日本語レベル確認、受講者の希望確認
第2回	自己紹介と修士論文の テーマについて作文する	前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答 受講生の修士論文のテーマを作文によって確認
第3回	課題文①	【演習1】前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①の音読確認、要約文の書き方を講義、要約文を書き提出
第4回	課題文②	【演習2】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①について討議、課題文②音読確認、要約文を書き提出
第5回	課題文③	【演習3】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文②について討議、課題文③音読確認、要約文を書き提出
第6回	課題文④	【演習4】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文③について討議、課題文④音読確認、要約文を書き提出
第7回	課題文⑤	【演習5】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文④について討議、課題文⑤音読確認、要約文を書き提出
第8回	課題文⑤、まとめ	【演習6】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文⑥について討議、要約文を書くことで何が学べたか自己評価した後、感想や考えを出し合いまとめる。
第9回	小論文を書く①	【演習7】小論文のテーマ設定・論理展開・段落構成等について講義、次回の小論文テーマ指示
第10回	小論文を書く②	【演習8】小論文を書き提出

第11回 小論文を書く③

【演習9】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、次回の小論文テーマ指示

第12回 小論文を書く④

【演習10】小論文を書き提出

第13回 小論文を書く⑤、まとめ
概要発表会のレジュメ作成準備

【演習11】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、概要発表会のレジュメの書き方について講義

第14回 概要発表会の口頭発表練習

【演習12】レジュメ提出、概要発表会の口頭発表練習、感想・意見交換

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
- ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認すること。
- ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

秋学期の国際文化研究日本語論文演習Bを継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学

<研究テーマ>村上春樹ほか

<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue read Japanese logical sentences and practice writing it to extend ability to write the master's thesis of own specialized field.

国際文化研究日本語論文演習B

浅利 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、専門分野の論理的文章を読み、書く練習を通じて、日本語を読み、書く能力を向上させ、専門分野の修士論文を書くための基礎力を拡充する。

【到達目標】

- ・専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約し、口頭で発表できる。
- ・自分の修士論文のテーマに関して、4000 字程度の小論文を書くことができる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて議論できる。（発言者ひとりひとりの意見を正確に聴き取り、テーマの方向性に沿った論理的な意見を述べたり問題点を指摘したりして、テーマを深化し発展させることができる）

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

第 1 回の授業で、各受講生は自分の研究テーマについてスピーチします。第 2 回の授業では、全員が自分の研究テーマについてまとめた作文を提出し、添削を受けた後、音読発表します。第 3 回から第 7 回までは、各受講生が自分の研究テーマに沿った書籍や文献から一定の長さの日本語の文章を抜粋して全員に配布し、その要約を書いて発表し、全員でその内容や研究テーマとの関連性について感想・意見を出し合います。第 8 回から第 13 回は、各自の研究テーマに沿った小論文を書きます。1200 字程度から書き始め、第 13 回では、4000 字程度の小論文を完成させます。第 14 回は、完成した 4000 字の小論文を口頭発表し、相互評価をします。提出された要約文・小論文は、すべて添削して返却します。学習内容・方法や速度・難易度は、受講生の水準に合わせて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション・研究テーマについてスピーチ	演習の目的と方針の説明、受講者の日本語レベル、研究テーマ、受講者の希望確認
第 2 回	作文「私の研究テーマ」	【演習 1】作文後、添削された作文を各人が音読して発表し、添削内容について質疑応答
第 3 回	課題文①	【演習 2】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文①について討議
第 4 回	課題文②	【演習 3】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文②について討議
第 5 回	課題文③	【演習 4】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文③について討議
第 6 回	課題文④	【演習 5】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文④について討議
第 7 回	課題文⑤	【演習 6】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文⑤について討議
第 8 回	小論文を書く①	【演習 7】小論文を書く際のテーマ設定・論理展開・段落設定等について講義
第 9 回	小論文を書く②	【演習 8】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 10 回	小論文を書く③	【演習 9】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 11 回	小論文を書く④	【演習 10】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 12 回	小論文を書く⑤	【演習 11】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 13 回	小論文を書く⑥	【演習 12】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 14 回	小論文を書く⑦（まとめ）	【演習 13】4000 字の小論文を口頭発表・相互評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
- ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認し、正確に音読できるよう練習すること。
- ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）
提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の論理的文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

各自、パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

春学期の国際文化研究日本語論文演習 A からの継続履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近現代日本文学
<研究テーマ> 村上春樹ほか
<主要研究業績> 『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第 4 輯』『村上春樹研究叢書第 5 輯』『村上春樹研究叢書第 6 輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue read Japanese logical sentences and practice writing it to extend ability to write the master's thesis of own specialized field.

国際文化研究日本語論文演習C

浅利 文子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語で修士論文を書き出す準備を整え、執筆について学ぶ。

【到達目標】

- ・修士論文完成までのスケジュール（概要発表会・中間発表会等）を確認する。
- ・従来の修士論文の体裁（構成・分量・注の付け方・図表の入れ方・参考資料の掲載方法・文体・印字体等）を確認する。
- ・修士論文の主題と副題を決める。
- ・修士論文の構成（章立て・各章の分量・各章の内容と節の数やその分量）を決める。
- ・修士論文の序論、あるいは第 1 章を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」の達成のために特に重要であり、「DP1」の達成のために重要である

【授業の進め方と方法】

前半の 7 回で、修士論文を書き始めるための具体的な準備を行い、後半の 7 回は、実際に修士論文を書き始めます。準備の段階では、まず、今まで国際文化研究科に提出された修士論文の体裁を確認し、各自のテーマに従って修士論文の構想を具体的にまとめます。次に、7 月末の概要発表会、10 月末の中間発表会のレジュメの書き方を学び、口頭発表・質疑応答の練習をすることによって、修士論文の構想・テーマを具体化し深化させます。第 8 回からは、各自修士論文の序論あるいは第 1 章を書き始めます。段落と段落、節と節がそれぞれ文章としてのまとまりを持ち、論理的構成の下で互いに関連し合うことを学ぶことを目標として、一つの章を完成させることを目標とします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	・授業の目的と内容・方針の説明 ・各受講生の修士論文のテーマと進捗状況の確認
第 2 回	従来の修士論文の体裁を確認する	・構成、分量、注の付け方、図表の入れ方、参考資料の掲載方法、文体、印字体等
第 3 回	概要発表会のレジュメの書き方	・概要発表会のレジュメの書き方について講義
第 4 回	レジュメ提出・添削	・レジュメを書く ・各人のレジュメを添削
第 5 回	レジュメに基づいて口頭発表の練習①	・質疑応答 ・声の出し方、話し方
第 6 回	レジュメに基づいて口頭発表の練習②	・時間の使い方 ・概要発表会、中間発表会、学会発表等のスケジュールを確認
第 7 回	修士論文の主題・副題、論文構成を確認する	・主題と副題、章立てと分量配分を書いて提出
第 8 回	修士論文を書く①	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出
第 9 回	修士論文を書く②	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出
第 10 回	修士論文を書く③	・添削、質疑応答 ・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出
第 11 回	修士論文を書く④	・添削、質疑応答 ・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出
第 12 回	修士論文を書く⑤	・添削、質疑応答 ・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出
第 13 回	修士論文を書く⑥	・添削、質疑応答 ・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出
第 14 回	修士論文を書く⑦	・添削、質疑応答 ・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の内容については、終始指導教官に連絡を取り、適切な指導を受けてください。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 75 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）
提出物 25 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【学生が準備すべき機器他】

各自パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

国際文化研究日本語論文演習 A・B 受講者が継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近現代日本文学

<研究テーマ> 村上春樹ほか

<主要研究業績> 『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第 4 輯』『村上春樹研究叢書第 5 輯』『村上春樹研究叢書第 6 輯』（日本語版）等

【Outline and objectives】

The foreign students that Japanese is not mother tongue learn how to prepare and begin to write a master's thesis in Japanese.

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

修士論文演習 B

各専任指導教員

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

修士論文演習 A

佐々木 一恵

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

修士論文演習 B

佐々木 一恵

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文（リサーチペーパー）に必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

リービ 英雄

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

修士論文演習 B

リービ 英雄

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

修士論文演習 A

曾 士才

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year. While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/ the Research paper.

修士論文演習 B

曾 士才

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの第 2 稿を提出し、それをもとに議論
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR600G1 - 503

修士論文演習 A

大嶋 良明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文（リサーチペーパー）のテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文（リサーチペーパー）執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文（リサーチペーパー）の執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

This course is for group discussion and mutual critique on on-going individual graduate research projects and for studying research methodology all at master's thesis level or research paper project level.

修士論文演習 B

大嶋 良明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文（リサーチペーパー）を執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文（リサーチペーパー）を完成することができる。
2. 修士論文（リサーチペーパー）の内容と意義をわかりやすく口頭で発表し、これに関わる質疑応答ができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文（リサーチペーパー）に必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の一部を執筆し発表・議論
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の一部を執筆し発表・議論
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文（リサーチペーパー）の全体構成を発表し議論
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文（リサーチペーパー）の全体構成を発表し議論
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文（リサーチペーパー）の全体構成や結論を再検討し議論
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の一部を執筆し発表・議論
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の一部を執筆し発表・議論
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の初稿を提出し、それをもとに議論
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の初稿を提出し、それをもとに議論
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の第 2 稿を提出し、それをもとに議論
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の口頭発表とそれについての議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

This course is the continuation of the spring semester course for the fall. This course is for group discussion and mutual critique on on-going individual graduate research projects and for studying research methodology all at master's thesis level or research paper project level.

修士論文演習 A

中島 成久

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文（リサーチペーパー）のテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

- 1. 修士論文（リサーチペーパー）執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
- 2. 修士論文（リサーチペーパー）の執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

- 1. 修士論文（リサーチペーパー）執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
- 2. 修士論文（リサーチペーパー）の執筆を始める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
第 2 回	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 3 回	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 4 回	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 5 回	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 6 回	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 7 回	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 8 回	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 9 回	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 10 回	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）のための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
第 11 回	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
第 12 回	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
第 13 回	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
第 14 回	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【その他の重要事項】

特になし

【Outline and objectives】

The students are required to fix their themes and titles of their master thesis (or research paper) based on their learning at the first year of graduate school, and they are required to additional researches and are highly recommended to start writing.

修士論文演習 B

中島 成久

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文（リサーチペーパー）を執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文（リサーチペーパー）を完成することができる。
2. 修士論文（リサーチペーパー）の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文（リサーチペーパー）に必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
第 2 回	研究成果の検討	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
第 3 回	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の一部を執筆し発表・議論
第 4 回	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の一部を執筆し発表・議論
第 5 回	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文（リサーチペーパー）の全体構成を発表し議論
第 6 回	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文（リサーチペーパー）の全体構成を発表し議論
第 7 回	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文（リサーチペーパー）の全体構成や結論を再検討し議論
第 8 回	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の一部を執筆し発表・議論
第 9 回	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の初稿を提出し、それをもとに議論
第 10 回	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の初稿を提出し、それをもとに議論
第 11 回	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の初稿を提出し、それをもとに議論
第 12 回	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の初稿を提出し、それをもとに議論
第 13 回	論文執筆指導⑧	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の初稿を提出し、それをもとに議論
第 14 回	論文執筆指導⑨	履修者ごとに修士論文（リサーチペーパー）の初稿を提出し、それをもとに議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化人類学

<研究テーマ>インドネシアの土地紛争の研究

<主要研究業績>

N Nakashima, Expulsion of Nias Squatter and Expansion of Oil Palm Plantation, JIES No 32, 2018

『インドネシアの土地紛争』創成社新書、2011

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

修士論文演習 A

高柳 俊男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士課程 1 年次に修得した専門知識と方法論をふまえて修士論文/リサーチペーパーのテーマを固め、執筆に必要な追加調査や文献サーベイを行い、論文の執筆を開始する。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパー執筆に必要な文献サーベイや調査を実施できる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの執筆を始める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献講読と発表、調査（一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）の実施と報告をうけて研究指導を行う。7 月の構想発表会でそれまでの成果を発表し、広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 A と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	修士 1 年での学習成果と各履修生の研究構想および研究計画の確認、進捗状況の情報共有。教員からのフィードバックと助言
2	文献サーベイと調査①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
3	文献サーベイと調査②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
4	文献サーベイと調査③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
5	文献サーベイと調査④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
6	文献サーベイと調査⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
7	文献サーベイと調査⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
8	文献サーベイと調査⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
9	文献サーベイと調査⑧	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
10	文献サーベイと調査⑨	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーのための文献サーベイと調査の実施、及びその結果の報告・議論
11	研究成果のまとめ①	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
12	研究成果のまとめ②	履修者ごとに研究成果を文章化し、報告と議論を行う
13	研究発表準備①	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う
14	研究発表準備②	履修者ごとに研究成果に関する口頭発表（構想発表会）の準備を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、構想発表会の結果、研究および論文執筆の進捗を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper based on the knowledge and methodology that they have acquired in the first year.

While taking this course, students are expected to conduct additional research and literature survey and start writing the Master's thesis/the Research paper.

修士論文演習 B

高柳 俊男

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/the Research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆する。

【到達目標】

1. 修士論文（リサーチペーパー）を完成することができる。
2. 修士論文（リサーチペーパー）の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士論文（リサーチペーパー）に必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、及び口頭発表を指導する。論文の骨子を 11 月の構想発表会で発表し広くコメントを受ける。修士課程 2 年次の必修科目である国際文化共同研究 B と連携を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者ごとに修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を共有
2	研究計画の検討	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画の検討
3	論文執筆指導①	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
4	論文執筆指導②	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を発表し議論
7	研究発表の振り返り	履修者ごとに中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し議論
8	論文執筆指導③	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
9	論文執筆指導④	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し発表・議論
10	論文執筆指導⑤	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
11	論文執筆指導⑥	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
12	論文執筆指導⑦	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの初稿を提出し、それをもとに議論
13	論文執筆指導⑧	履修者ごとに残された課題を抽出。年末年始休暇中の論文完成に向けた計画・指導
14	口頭発表指導	履修者ごとに修士論文/リサーチペーパーの口頭発表とそれについての議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行う事。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【参考書】

履修者のテーマにより必要な文献をそのつど紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取り組み、中間発表会の結果、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PC および学内 Web、インターネットを活用しオンラインの情報共有を常に行うこと。

OTR700G1 - 001

博士論文演習 I A

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化する。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につける。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回	これまでの研究の振り返り	修士論文など今までの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する
2 回	研究テーマの確認	第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練し確認する
3 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
4 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
5 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
6 回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
7 回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
8 回	文献サーベイ⑥	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
9 回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める
10 回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める
11 回	研究報告③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める
12 回	研究報告④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文の準備を進める
13 回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する
14 回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して研究計画を検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し、自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of ideas for the dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make a dissertation chapter into a publishable journal article.

OTR700G1 - 002

博士論文演習 I B

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化する。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につける。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す
2 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
3 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
4 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返り
8 回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
9 回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する
10 回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論
11 回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論
12 回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論
13 回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆・議論
14 回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年次に向けた春季休暇中の計画

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し、自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究の進展、研究発表、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of ideas for the dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make a dissertation chapter into a publishable journal article.

OTR700G1 - 003

博士論文演習Ⅱ A

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施する。調査結果をふまえて研究計画の修正及び 2 本日の投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する 2 本日の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に学生が調査の進捗を報告する。それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返り	1 年次及び 2-3 月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
5 回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
6 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
7 回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
8 回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
9 回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
10 回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
11 回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
12 回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
13 回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して春学期の研究成果をまとめる
14 回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し夏季休暇中の調査内容を明確化する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究（調査）の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another chapter into a journal article for publication.

OTR700G1 - 004

博士論文演習ⅡB

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施する。調査結果をふまえて 2 本目の投稿論文の執筆や学会発表の準備を進める。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる 2 本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に学生が調査の進捗を報告する。それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行う。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いてゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返り
8 回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
9 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
10 回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論
11 回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論
12 回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論
13 回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論
14 回	まとめ	2 年間の研究成果のまとめ、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究（調査）の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another chapter into a journal article for publication.

OTR700G1 - 005

博士論文演習Ⅲ A

各専任指導教員

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆する。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し議論する。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回	執筆・調査計画の立案	2-3 月の研究成果の報告。追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画
2 回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する
3 回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する
4 回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する
5 回	予備論文（草稿）の発表	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる
6 回	予備論文（草稿）への指導	予備論文をもとにした議論と指導
7 回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する
8 回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する
9 回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する
10 回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する
11 回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ博士論文全体の構成と流れを議論する
12 回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ博士論文全体の構成と流れを議論する
13 回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して博士論文の全体構成を固める
14 回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントを踏まえて、博士論文全体の構成と内容を見直し本格的な執筆を行なう

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 3 年目は博士論文執筆に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって文献を読んで補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、博士論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

OTR700G1 - 006

博士論文演習Ⅲ B

各専任指導教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆する。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会場で発表する。審査委員からの助言を受けて必要な改善を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて最終的な指導を行う
2 回	投稿論文・学会発表準備①	提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする
3 回	投稿論文・学会発表準備②	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする
4 回	投稿論文・学会発表準備③	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする
5 回	口頭発表指導①	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討
6 回	口頭発表指導②	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討
7 回	口頭発表指導③	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討
8 回	学位請求論文の要旨指導①	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導
9 回	学位請求論文の要旨指導②	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導
10 回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習
11 回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習
12 回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する
13 回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する。また、商業出版に向けた論文の修正を行う
14 回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する。また、商業出版に向けた論文の修正を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 3 年目は博士論文執筆に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって文献を読んで補強する。

【テキスト（教科書）】
特になし。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、博士論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

OTR700G1 - 003

博士論文演習Ⅱ A

浅川 希洋志

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施する。調査結果をふまえて研究計画の修正及び 2 本目の投稿論文の執筆を進める。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に係る 2 本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に学生が調査の進捗を報告する。それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返り	1 年次及び 2-3 月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
5 回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
6 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
7 回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
8 回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
9 回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
10 回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
11 回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
12 回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
13 回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して春学期の研究成果をまとめる
14 回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し夏季休暇中の調査内容を明確化する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し自ら補強する。

【テキスト（教科書）】
特になし。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究（調査）の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another chapter into a journal article for publication.

OTR700G1 - 004

博士論文演習Ⅱ B

浅川 希洋志

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施する。調査結果をふまえて 2 本日の投稿論文の執筆や学会発表の準備を進める。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる 2 本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

定期的に学生が調査の進捗を報告する。それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行う。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いてゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返り
8 回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
9 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を発表する
10 回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論
11 回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論
12 回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論
13 回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆・議論
14 回	まとめ	2 年間の研究成果のまとめ、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、修士課程の講義科目等を履修し自ら補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、研究（調査）の進展、投稿論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another chapter into a journal article for publication.

OTR700G1 - 005

博士論文演習Ⅲ A

森村 修

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆する。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し議論する。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回	執筆・調査計画の立案	2-3 月の研究成果の報告。追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画
2 回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する
3 回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する
4 回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を報告・議論する
5 回	予備論文（草稿）の発表	博士論文の一部を執筆し報告する。それをもとに指導を行う。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる
6 回	予備論文（草稿）への指導	予備論文をもとにした議論と指導
7 回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する
8 回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する
9 回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する
10 回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ追加調査や文献サーベイを行い、その成果を発表する
11 回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ博士論文全体の構成と流れを議論する
12 回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ博士論文全体の構成と流れを議論する
13 回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して博士論文の全体構成を固める
14 回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントを踏まえて、博士論文全体の構成と内容を見直し本格的な執筆を行なう

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 3 年目は博士論文執筆に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって文献を読んで補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、博士論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

OTR700G1 - 006

博士論文演習Ⅲ B

森村 修

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆する。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会場で発表する。審査委員からの助言を受けて必要な改善を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて最終的な指導を行う
2 回	投稿論文・学会発表準備①	提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする
3 回	投稿論文・学会発表準備②	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする
4 回	投稿論文・学会発表準備③	完成した博士論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表の指導をする
5 回	口頭発表指導①	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討
6 回	口頭発表指導②	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討
7 回	口頭発表指導③	博士ワークショップもしくは学内の国際文化情報学会での発表内容の検討
8 回	学位請求論文の要旨指導①	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導
9 回	学位請求論文の要旨指導②	公開審査会に向けた、学位請求論文の要旨に対する指導
10 回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習
11 回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けた学位請求論文の発表練習
12 回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する
13 回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する。また、商業出版に向けた論文の修正を行う
14 回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて必要であれば学位請求論文を修正する。また、商業出版に向けた論文の修正を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行う。特に、博士課程 3 年目は博士論文執筆に力を注ぐ。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって文献を読んで補強する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢、博士論文の執筆状況等を総合的に勘案して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

新規科目につき特になし。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

OTR700G1 - 101

博士ワークショップ I A

佐々木 一恵、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、構想発表会で発表する。論文プロポーザルには、(1) 研究テーマ、(2) 研究の目的、(3) 研究の方法、(4) 研究計画、(5) 期待される成果、(6) 文献リスト、等が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、構想発表会において論文プロポーザルを発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 2 回	討論者②	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 3 回	討論者③	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 4 回	討論者④	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 5 回	討論者⑤	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 6 回 ～ 第 14 回	研究発表とコメント	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 A の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）： 20 点

「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②論文プロポーザル： 80 点

・論文プロポーザル 40 点・発表： 40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・国際文化共同研究 A のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談する。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

博士ワークショップ I B

佐々木 一恵、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメントーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げ、中間発表会で発表する。論文プロポーザルには、(1) 研究テーマ、(2) 研究の目的、(3) 研究の方法、(4) 研究計画、(5) 期待される成果、(6) 文献リスト、等が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 2 回	討論者②	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 3 回	討論者③	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 4 回	討論者④	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 5 回	討論者⑤	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 6 回 ～ 第 14 回	研究発表とコメント	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 B の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）： 20 点

「国際文化共同研究 B」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、中間発表会での他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②論文プロポーザル： 80 点

・論文プロポーザル 40 点 ・発表： 40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・国際文化共同研究 B のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは秋学期の初めに同授業の担当者も含めて相談する。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

OTR700G1 - 103

博士ワークショップⅡ A

佐々木 一恵、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それを踏まえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、構想発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 2 回	討論者②	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 3 回	討論者③	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 4 回	討論者④	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 5 回	討論者⑤	国際文化共同研究 A の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 6 回 ～ 第 14 回	研究発表とコメント	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 A の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）： 20 点

「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②先行研究分析報告： 80 点

・先行研究分析報告 40 点 ・発表： 40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・国際文化共同研究 A のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談する。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

博士ワークショップⅡ B

佐々木 一恵、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それを踏まえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 2 回	討論者②	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 3 回	討論者③	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 4 回	討論者④	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 5 回	討論者⑤	国際文化共同研究 B の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 6 回 ～ 第 14 回	研究発表とコメント	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 B の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）： 20 点

「国際文化共同研究 B」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②先行研究分析報告： 80 点

・先行研究分析報告 40 点 ・発表： 40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・国際文化共同研究 B のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは秋学期の初めに同授業の担当者も含めて相談する。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

OTR700G1 - 105

博士ワークショップⅢ A

佐々木 一恵、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。構想発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、構想発表会においてこれまでの研究成果や博士論文の草稿を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 2 回	討論者②	国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 3 回	討論者③	国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 4 回	討論者④	国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 5 回	討論者⑤	国際文化共同研究 A の討論者として修士課程 2 年の発表に対するコメントを行う
第 6 回 ～ 第 14 回	研究発表とコメント	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の発表に対するコメントを文書で作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 A の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）： 20 点
「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②博士論文を構成する章： 80 点
・博士論文を構成する章 40 点 ・発表： 40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・国際文化共同研究 A のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかはあらかじめ同授業の担当者も含めて相談する。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

博士ワークショップⅢ B

佐々木 一恵、岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得する。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」、「DP2」、「DP3」、「DP4」の達成のために特に重要である

【授業の進め方と方法】

修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめる。また、中間発表会において博士論文の要旨を発表するとともに、他の発表に対するコメントを提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	国際文化共同研究 B の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 2 回	討論者②	国際文化共同研究 B の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 3 回	討論者③	国際文化共同研究 B の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 4 回	討論者④	国際文化共同研究 B の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 5 回	討論者⑤	国際文化共同研究 B の討論者として 修士課程 2 年の発表に対するコメント を行う
第 6 回 ～ 第 14 回	研究発表とコメント	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際文化共同研究 B の発表に対するコメントは授業内に行うと同時にレポートとして提出する。中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出する。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）： 20 点

「国際文化共同研究 B」に討議者として少なくとも 5 回参加し、コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章： 80 点

・博士論文を構成する章 40 点 ・発表： 40 点

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・国際文化共同研究 B のうち、いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは秋学期の初めに同授業の担当者も含めて相談する。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当する。

【Outline and objectives】

The seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on master's students' presentations, and to also present their research proposals and a dissertation chapter.

